北辰會雜誌

第五拾號

明治四十一年三月三十一日發行

（非賣品）

第四高等學校北辰會

北辰會雜誌第五拾號目次

論說

○明代の文僧(承前)……赤井直好
○倫理學者對自然主義……文、三　雨森一烏

文苑

○關が原……文、一　曾根東
○盛臻上人華甲壽序……赤井直好
○一炷……獨、一　鈴木青花
○薄光……和歌會
○俳句……

北辰時評

○戊申倶樂部に呈す……
○演說部に與ふ……

雜報

○村上先生を悼む……
○洛陽の快戰……
○無題錄……

部報

○劒道部報○演說部報……

附錄

○時習寮大茶話會を觀る……

北辰會雜誌第五十號

論說

明代の文僧

赤井直好

明代に於ける文僧は、其文派に於て、唐宋古文の正派に屬すといへども、其作家に至りては、固より寥々晨星も啻ならず、圓菴紫柏諸人の外、概して見るべきものなきが如し、且つ由來緇流にありては、概ね文字を蔑視し、只自己の胸臆を披瀝すれば則ち足る、文字の如何は問ふところにあらずとなし、雅俗相混し、清濁倶に用ゐ、進みて文章句法を研究するを屑しとせざりしを以て、純然たる古文の作家として、旗幟を文壇の一方に樹たるものありしを見ず、是を以て明代の文僧にありても、其本領とするところは、固より古文其物にあらずして、他に一大目的の存するものあるを以て、たとひ古文を作爲して文僧を以て目せらるゝにもせよ、其作品に至りては、敢て明代に於ける一般作家を凌駕せりといふべきにあらず。仔細に之を論ずるときは、或は尋常作家に比して數等の遜色あるを認めずんばあらず、されど同人皆文字を立てざる間にありて、獨其風潮に牽かれず、堂々古文の正脈を奉せしもの、亦一種特立の士として、吾人の品題に値する所

以ならむか、

若し夫れ其文格の如何に至りては、概して宋文に矩矱し、其範囲を脱せざるものにして、明文の特質を有すること、亦明代に於ける一般作家の文と其轍を一にするものあるに似たり、但胸裡既に幽遠深妙なる佛理に習へるを以て、其發して詞藻となれるものも、亦清高澹遠なるものなきにあらず、是れ尋常作家と大に其撰を異にするところにして、叢林文家の一特色たらずんはあらざるなり、余は以下聊か各人に就て、其文藻を品題せんと欲す、

一、圓菴禪師

圓菴禪師、名は居頂、字は玄極、圓菴は其自號、台の黄巖の人、元季の衰亂に當り、干戈鼎沸せしかば、乃ち佛門に入り、空室禪師を禮して落髪せり、明の獨菴禪師が、圓菴禪師壽像の賛中にいへるあり、曰く、

天上の玉麟、僧中の丹鳳、氣は衡嶽を凌き、胸は雲夢を呑む、百氏を評して中道玄門を立て、萬物を藻して無作妙用を得たり、眞に第一流の人、誰れか其れ擬すべきを知らむ、

と、以て其性格造詣を知るに足る、初め四明の翠巖に住し、次て鬱の雙林に遷り、所在振興皆成績あり、後太祖の召に應して、京師に至り、又旨を奉して靈谷に住持となり、說法敎化其道を得ざるなく、成祖の世に至りても、寵遇頗る厚く、實に叢林の中興者なりしといふ、

師幼にして詩文を好み、天禀の才あり、敢て雕蟲末技を以て之を輕視せず、其友人に答ふる書中にいへるあり、曰く、

夫れ足下本末の說、豈道と文との謂ならむや、道は本にして文は末なる、固よりなり、然れとも道は文にあらざれば、以て載すべきなく、文は道にあらざれば、以て言ふべきなし、故に古の道に明かなる者は、必す能く文に達す、吾は惟道を明かにするを務むるのみと謂ひて、文を以て道を害するものとなす者は、則ち吾未だ之を信せざるなり、

と、是れ全く儒家の陳套語なり、而も叢林知識の口よりして之を發するときは、特に其妙を見る、師はかくの如き識見を以て、疆めて文辞を商量し、以て外魔を攘禦し、宗風を振興するの具となさむとせり、故に法を空室禪師に聽くの傍、宋庸菴先生に就きて、古文の法を問へり、鳥草齊に答ふる書中に曰く、

四明に來るに及ひて、首として宋庸菴先生に謁す、先生其文を好むことの篤きを愛し、平日師友に受けし所のものを以て、悉く之を吐て蘊ふることなし、宋翰林、朱雲巢、及ひ行中、天鏡、白雲の三師等の若きは、皆嘗て之に就きて講せしも、庸菴先生の久しく且親しきに若かざるなり、

と、因て文を爲る所以の法を說いて、靜の一字に歸して曰く、

某竊に聞く、文を爲るには其浩然の氣を養ふを以て主となすと、浩然の氣は集義に由りて生するも、亦靜に本つくものなり、司馬子長曰く、神太た用ゐれは則ち竭き、形太た用ゐれは則ち弊ゆ、故に必ず先づ其形神を定む、と其れ旨あるかな、

と、其言は正に儒家の言にして、而も要は佛理に歸するものなり、

今、圓菴集を見るに、正に其論旨に由りて、一部二冊十卷の文集をなせり、其文勉めて唐宋の矩度を摸し、間々韓文の口吻に倣へるものあるも、其文字は寧ろ歐蘇より出て、純然たる宋文なりといふべし、其佛理を驅使するところは、曾南豐か經義を布演するに似、其雄健なるところは、同時宋潛溪に及はざるところあるも、又其步趨を同しうするものなりといふべし、之を要するに、圓菴の文は尋常緇流の文にあらす、寧ろ叢林に於ける儒家の文なりといふべく、其矩度あり精彩あるところ、之を專門作家の間に置くとも、毫も遜色あるを見ず、此れ余か緇流にありて特に出色を推す所以なり、明の王士魯、師が文を評して、

辭語雄健、洪河巨浪の如く、得て遏むべからざるものあり、意趣高妙、玄酒太音の如く、得て求むべからざるものあり、

といひ、高遜志も又、

圓菴禪師佳作、詞理俱に到る、而して筆力馳騁、健體空を搏ち、一擧千里なるが如し、尋常斥鷃の企望すべき所にあらざるなり、

といへるもの、俱に其肯綮に中れるものなりといふべし、

二、紫柏大師

大師、諱は眞可、字は達觀、晩に紫柏と號す、資性雄猛、容貌奇偉、長して志益々大、嘗て詩あり、曰く、屠狗雄心未易消と、二十才、僧明覺を禮して剃髮し、每に私語三歎して曰く、之を視れは肉なけれども、之を喫すれば味ありと、一日覺を辭して曰く、吾れ當に去りて諸方に行脚し、善知識に歷參して、大事を究明すべしと、遂に天下を雲遊すること三十年、像は彌勒の若く、心は寒潭の若く、聲は洪鐘の若く、口は懸河の若く、靜慧玄朗、名海內に高く、世擬するに臨濟尊者の復出を以てせり、道人、平生人に於て貴賤大小の別なく、平等心を持して之を待ちしかば、賤者小者は其容を喜び、貴者大者は目して傲となし、間々排詆するものあり、果然訛言大獄を搆ふるに及びて、道人も亦罣誤を以て理に下さるゝに至れり、其獄にあるや、晝夜跏趺して寐ねず、同纍のもの之を扣けば、人に隨て啓迪し引て善に向はしめざるなし、其拷訊に逢ふや、神色自如、議を持すること甚だ正しく、衰老殘軀を以て、備さに笞楚を嘗め、死に抵るまで屈せず、眞に烈士の風ありき、獄に入りしより十三日にして無疾坐化す、壽止六十一といふ、憨山大師、紫柏老人集に序して曰く、

今楚石を去る二百余年、達觀禪師出つるあり、禪宗已に墜ちし時に當りて、蹶起して之を力振す、眞に末法の一大雄猛丈夫なるかな、

と、皷山大師も亦七古讀紫柏老人集有感の中に、

挑燈夜讀老人書、志弘大法早捐軀、一片苦心如赤日、金光曦赫天東衢、

といへり、後人の推奬至れりといふべし、余特に其園中語錄を讀み、師が死生の間に處して、泰然自若たるを見て、轉々其包容の大なるに驚くと共に、其壯烈の狀、雄心遂に全く消にざるものあるを信し、先人の推奬眞に虛しからざるを知れり、

紫柏大師は、實に一大雄猛の丈夫なり、區々文字言語を以て論すべきものにあらず、況や其人

に開示するところ、大抵他人をして代書せしめ、未た嘗て再一目を寓せざりしと稱するをや、然れども大師も亦敢て文字を輕視するものにあらず、其石門文字禪に序するを見るに曰く、

蓋し禪は春の如く、文字は則ち花なり、春、花に在れば、全花是れ春、花、春に在れば、全花是れ花、而して禪と文字と二あらむや、故に德山臨濟、棒喝交々馳するも、未た嘗て文字にあらずんばあらず、而して禪と文字と二ありといはむや、

と、亦以て其文に志すところありしを知るべし、大師著はすところ、紫柏老人集十五卷、分ちて八冊となす、憨山大師の校閲するところに係る、別に紫柏老人別集四卷ありといふ、憾らくは未た目を寓するを得ず、藕益大師、嘗て紫柏集を評して曰く、

紫柏集點完、此老博地の凡夫を以て、力めて煩惱魔軍と戰ひ、一生辨を取る、眞に地に踞するの獅子、網を透す金鱗なり、今其法語を觀るに、精悍決烈、猶頑夫をして廉に、懦夫をして立たしむるに足り、柔情媚骨をして覺わず冰消瓦解せしむ、幸に細々心を留めなば、必ず羹牆寤寐に之を見む、

と、余熟々紫柏集を讀むに、浩々洋々、儒を說き、道を談し、遂に佛理に歸するところ、其雄辨達識、誠に精悍豪快、前評の如きものあり、唯圓菴禪師の若く、文の爲に文を作りしものにあらざるを以て、間々雅俗相混ずるを免れず、然れとも其純粹なるものに至りては、鐵馬地を蹶て立ち、振鬣一嘶、萬馬皆嘿するの概なくむばあらざるなり、

三、雲棲太師

雲棲太師、は古杭仁和縣の人、姓は沈氏、世々著族たり、明の嘉靖十四年正月廿二日を以て生る、歲十七已に德行文章を以て名あり、三十二歲、南五臺性天理和尚に從ひて祝髮し、法諱を袾宏、字を佛慧と稱し、別に蓮池と號す、既にして徧く名山を訪ひ、智識に歷參し、隆慶五年、孤錫南に還て、雲棲山水の幽勝なるを愛し、居然在淵の思を興せり、門人等乃ち爲に草を薙り、林を開きて、廬を上に結ひ、師を延て之に居らしむ、而して居民も亦師が淨業頗る正しく、慈悲弘深なるに感し、相與に踴躍して寺を建て、遂に叢林を成すに至れり、是の時に當り、僧風愈漓く、聲利の場に馳獵して、恬として異とせざるものあり、師乃ち律儀を删定し、其弊を矯正すること頗る嚴なりしかば、人稱して雲棲布薩の嚴、諸方に傑出し、千古に上嘉すといへり、師又禪敎二宗、尙流弊多く、法輪覆轍に幾きを愍み、因て淨土の一門を闡き、彌陀の一經を疏鈔し、人をして念佛三昧を得しめたること、幾何なるを知らず、かくて眞實を尙ひて虛浮を黜け、儉朴に敦うして華靡に薄く、戒德を崇て精修を勵まし、實踐躬行すること、八十年來、未た嘗て一日も怠らす、萬曆四十三年七月四日示寂す、世壽八十有一、著はすところ、戒疏發隱、彌陀疏鈔、禪關策進、緇門崇行錄、戒殺放生文、竹窓隨筆等の書ありといふ、

師は少うして儒を學ひ、文を能くし、中年俗を離れて佛門に歸し、專ら一乘の法を究むるに至りしものなれば、所謂先入主となりしものか、敢て儒家を排斥せず、儒佛道三敎は、誠に一家なり、一家の中には、尊卑親疎の別あるが如く、三家の說くところ、深淺歷然殊なるものありとい

へども、同しく一理に歸するものなりと論すると共に、文章に於ても亦之を蔑視せず、其古文を論するところ、頗る聽くべきものあり、竹窓隨筆に曰く、

孔子の文は、正大にして光明、日月なり、彼の南華は、佳者は繁星掣電の如く、劣者は野燒の如し、孔子の文は、渟蓄にして汪洋、河海なり、彼の南華は、佳者は瀑泉驚濤の如く、劣者は亂流の如し、孔子の文は融粹にして温潤、良玉なり、彼の南華は、佳者は水晶瑠璃の如く、劣者は珉珂、珹玟の如し、孔子の文は、切近にして精實、五穀なり、彼の南華は、佳者は安南の荔の如く、大宛の葡萄の如く、劣者は未熟の梨と柿との如し、此其大較なり、

と、是れ六經四子の文と、莊子の文とを比較對照して、文を業とするものの爲に、何れを師とすべきかを論せしもの、其大所より立論せるところ、頗る能く肯綮を得たるものありといふべし、又直道錄に、漢唐宋三代の文を比較評論せしものあり、曰く、

文に至りては、漢最も古に近し、其文渾厚樸茂といへるは、則ち誠に然り、然れども文は大議論あるを貴ふ、上下に馳騁し、以て百家に抗折し、是非を辨駁し、心目を暢快にするに足るものは、則ち唐を勝れりとなす、文は大理致あるを貴ふ、正を崇ひ、邪を闢き、以て往聖を繼き、來學を開くべきは、則ち宋を勝れりとなす、斯二者は、漢の及はざるところなり、孰か漢獨文章を擅にすといふ、

と、蓋し唐文は八代の精を取りて、瑰奇壯偉の文を成せども、宋文は八代の美を一空し去て、明白暢達の文を成せり、是れ均しく古文なりといへども、其文品に於て、宋は唐に及はず、唐は漢に若かざる所以なり、然れども更に又他の一面より各代に於ける其特質を論せば、余輩といへども這樣の感なくむばあらず、師は少時已に文章に於て名聲あり、其文論に於て一隻眼を有するもの、固偶然ならずといふべし、

今大師が雲棲手著八冊を取りて之を讀むに、亦かの圓菴老師の如く特に好て古文を作爲したる跡を見ずといへども、筆路暢達、措字雅潔、頗る宋調を帶ふるを見る、其竹窓隨筆の如きに至りては、意旨高遠、文致簡勁、人をして一讀卷を釋るに忍びざらしむ、釋高泉隨筆に跋して曰く、

此書は大師の肝膽なり、學者の眼目なり、生死海の寶筏なり、閻羅王の赦書なり、佛も祖も聖も賢も、未た是を捨てゝ、能く成るとあらざるなり、因て之を書して以て夫の同志に告く、

と、高泉の心折既に是の如し、其道德一世に高かりしこと推して知るへく、而して其文章の貴きも、亦其盛德の致す所たるを知るべきなり

（未完）

倫理學者對自然主義

雨森一鳥

「丁酉倫理講演集」第六十四號に塚原學士が「自然主義の傾向と道德」と題して述べられたる意見は、大方當今の倫理學者が自然主義に對して一般に抱持せらるゝ所の意見なるべし、現に同誌上此問題に關して宮田氏の論ぜられたるところを見るに、塚原氏の說に比べて多少穩健なるべしと

思はるゝ所も無きにあらねど、要するに大同小異の論なり。察するに近時社會の風潮は未だ社會全斑に認められず（少くとも認められんとする時にあれば）これ迄で這般の問題は主として思想界の一部分に限られ、文藝上若しくは宗教上の單獨なる現象としてのみ思惟せられたりしと雖も、こは全く其外見たるに過ぎず、少しく心して社會風潮の內面に立ち入りて眺むる時は、所謂新時代の潮流は暗々の裡に社會全斑に亘りて荒まじき勢をなして前進しつゝある事實は何人も克く觀取し得るところならん、從つて此れ迄は文藝上の單獨的現象としてのみ迎へられたりし自然主義の傾向が、漸次思想界の全體に普及し、社會上重要なる問題を喚起して世の論者を動かし、教育、宗教乃至道德上、累を專門諸學者の上に及ぼさゞるべからざるに至れるは、社會の趨向上眞に止みがたき事と言ふべし。予輩は如上の問題に關して只に文藝批評家によりてのみならず、周く世の宗教家、教育家、道德家などによりて可成眞面目なる議論を聞かされんことを望めるや久しく、別して現今我學海の一要鎭たる丁酉倫理會の諸氏にしてこれ迄如上の問題に遭遇せられながら、空しく是を雲烟觀過せられしようの事例を見れば、今回とても必ずや同會諸氏の頗る有益なる議論を窺ひ得る事ならんと期待したりしに、豫期の功空しからずして（たとへ不十分ながらも）腹藏なき諸家の言をきかせらるゝことを喜ぶものなり。尙今後とても此問題に關して兩氏の如き學海に忠なる人々によりて益〻有益なる議論の表白せらるゝ事あるべしと思ふ、予輩は爰に以上兩氏の說を參して、現今の倫理學者が一般に新時代の風潮に對して如何なる見解を有し居るか、就中文藝上の自然主義に對しては大凡如何なる意見を有し居るか、其論の根據は如何、態度は如何等に就て討察する所あらんとしたるも、既に上にも述べしが如く、兩氏の說は大體の点に於て同じく、改めて是を參驗して見る程の事も無しと思へば爰には先づ塚原氏の說に就きて其論点の那邊に存するかを窺ひ、爰には氏の極言せざりし所並に氏の見るところと異る私見の一二を述べんと思ふ。」

氏は先其論題に明示せられたるが如く、現今の所謂自然主義の傾向を以て單に文藝上の特種的現象とのみは見られず、是を社會全斑、思想界全斑に亘りて一時代を掩ふ所の風潮なりと見られたる點は、既に世の論者の見るところと何等の殊る所なし、其論の終に於て氏は叮嚀に二三の例を示されたるにても明かなり、只氏は現今我社會（少くとも一部社會）にこの風潮を誘致したる（若しくは現はれたる）主要の原因を明示せられず、文藝上の自然主義に於ても單に我國民の弱點として徒に新を競ひ、奇を衒ひ、外圍の境遇に順應し易き結果なりとし、社會の風潮は偏く野卑淫猥に傾かんとしつゝありしに、日露戰爭の爲めに頓に其風潮を助成し、文藝上の自然主義、否寧ろ露骨主義と稱するを以て適當なりとする自然主義も明に此氣運に駕して現れたるものとなし、其が理由をば重に外圍の境遇に求められたり。氏の言はるゝ所、或は一分の理あらん、近來我社會の風潮は偏く野卑淫猥に傾かんとしつゝありと明言せらるゝ氏の論には果して正當の論據ありや否や、又氏に一歩を讓りて我社會はかゝる風潮（或は外見上なるかも知れず）を來しつゝありとするも、そは果して如何なる理由の下に立てるものなりや否や、尙一段の工夫を要すべしと雖も、遮莫外圍の境遇又は外界の刺戟が一度民心の弱点に投じ、輕浮なる國民を擧げてこれに趨らしめば、寧ろ明々の間に寒心すべき惡風潮を社會全般に流布せしむるの事實は何人も否むべきに

あらず、又日露戰爭以來社會上の風潮に顯著なる傾向を催起し、我思想界は爲めに疇昔の面目を一新したりとは八釜敷く世の論者の論ずるところにて、社會問題、道德問題、敎育問題に關する幾多主要の事件のそが提起せられたる原因をば、一括して此を日露戰役後の社會狀態に歸したりし程なれば、氏自らも亦如是の確信を有せらるゝとならば、予輩は此に對しては何事も言はざるべし。只爰に一言注意したきは、苟も一時代の風潮を論じ、文藝問題の可否如何を辯ずるに當りて、這回の問題と密接の關繫を有する國民精神の發露をば、單に外圍の境遇、外界の刺戟によりて推移するものとなすは果して正當の論なりや否や、換言すれば一國文明の問題は國民精神の內部的根本的熱烈なる中心要求の聲によりて進步を劃するものにはあらざるか否か、これ先當面の問題ならんと思ふ。たとへ如何なる社會の風潮、時代の傾向と雖も、一段と深遠なる根柢に立ち入りて見る時は、殆ど人間の推知し難き機微の點より冥々裡に流露し、自發し來るものにて、必しも外圍の境遇に支配せられず、外界の刺戟無くとも、自ら現前し來る可き根本的因素を有し、文藝、宗敎、道德の孰れを問はず、國民と國民精神の要求並に文明問題との直接交涉は一に此範域外に出づべからず、就中文藝と道德との關係に於て然りとなす。氏或は言はん、如斯は寧ろ架空の言のみ、實際問題とは固より何等の交涉もあるべからず、假令一斑には言ひ難きも、我國民の如く偏ら新を競ひ、奇を衒ひ、外國の境遇に順應し易き國民にありては、彼等に中心何等の必然的要求なくして常に所動的に一代の風潮を劃するものなり、近時文壇の自然主義とても何ぞ一部作家の醉興に外ならざらんやと、僻見も亦甚しと云ふべし、よし又氏に限りてかゝる無謀の言を吐かるゝ事なしとするも、現今の學者間には隨分斯る偏見を抱き居るもの少なからず、否、否、氏とてもかゝる偏見は免れざるものなり、氏は先其議論の初めに於て近時わが自然主義の文藝は、畢竟するに彼國文學の時代的糟粕を嘗むるものなりと爲し、言明して謂へらく、「自然主義は現代歐米に於て優勢なる思潮なりとして一度我が文藝に輸入せらるゝ時は恰も猛火の枯野を燒くが如く、頓に民心の弱點に投じ、殊に思想未だ軟弱なる青年子女より非常なる歡迎をうくるに至つたのである」と、氏は尙同俎上一刀を下して、將來に於ける自然主義の悲觀的運命をさへ豫想せられたり、文藝批評家ならざる氏の言として或は恕すべからんも、其皮相淺薄の見、むしろ唾棄すべきにあらずや。成程現今の自然主義の作家が頻りに北歐文學を賞讃し、イブセン、トルストイ、ハウプトマン諸家の喧傳せらるゝ、實に今日の如きはあらずと雖も、遮莫其主義作物に多少の類似点あればとて、現今自然主義の作家が一向ら彼國の思潮を模倣するに急なりと速斷する理由は那邊にあるべしや、又彼の思潮がわが「民心の弱點」に投じたりとなす理由は尙更何處に存すべしや、是れ甚だ見易き理なるに氏は何故に斯る漫然たる皮相の論をば吐さたりけん、試みに思へ、文藝園內に入り來るべき人性發展の徑路と、社會變遷の狀態とは一にして足るべからず、理想憧憬の時代は源流既に遠く、ローマンチシズム早く廢れ、理智、經驗、內省、自覺等は新なる文藝の樞機となり、木鐸となり、所在迷妄は打破せられ、論理的規約は破壞せられ、萬人悉く僞らず飾らざる浩々自然の態度を以す、直接現實世界と近逼交涉せんとする近代思想の潮流に棹して遠く其源流を觀すれば、杳として隔霞對春の感なき能はず、文藝の自然主義は實に近代思想

の一系統にして、思想界全般に普及せる現代自然主義傾向と其起原を同じふし、亦其性質を同じうすと言ふべく、國民性の必須的發顯に伴ふ新時代の新要求、新主張を根據として立てる人類自然の深奥なる絶叫、卽近代思想の潮流に觸接したる民心の現實生活に對する中心の欲求、時代精神の發露したるものと云ふべし。これ當然と言ふ可く、何れの國を問はず（時の遲速はあれ）文明國民の進歩上まさに辿らざるべからざる必然の運命なり、徑路なり、趨向なり、大勢なり、凡て摸擬以上の要素を有する國民の自發性なり、故に彼と此と思想上の契合点を有するものは摸擬にあらずして自然也。追蹤にあらずして必然也、迷信に隨喜したるもの、理想を憧憬し、傳說に支配せられ、習慣に拘束せられ、夢幻境の生活に朶頤したる時代は已に過ぎたり、社會生存競爭の益々激甚を加ふるに從つて人間は益々自己の生存を自覺する事切實にして、人格尊嚴の觀念と不拘束の觀念とは益々强大を加へ、最早眞生命の響なき習慣や、道德や、宗敎や、眞理や、法則や、人類進歩の階段にありては脛毛の價無き人爲的規範に其一擧手一投足を拘束纏縛せられて生滅するは彼等の最大苦痛なり、大打擊なり、此の自殺的人爲の大矛盾、大衝突、大撞着の前に一度覺醒し自覺したる國民の生活に煩悶、苦痛、不平、反抗、格鬪、破壞の精神の存するは寧ろ當然の事にして、世の文明の進むと共に、社會生存の競爭の激甚となると共に讓與は剝奪要求となり、從順は反抗乖離となり、平靜は苦鬪破壞となる可き這般の傾向に何等の矛盾ありや、撞着ありや、この恐るべき一大事實がわれ等が面上三寸の處に逼迫してあくまでも吾人を脅かさゞれば止まざらんとする時に吾等は果して能く現今の倫理學の如くに安全たる態度をとりて既往々の夢を貪るを得べきか、苟も社會人類の爲め、進歩向上する「人」のために作られたる道德規範なる上は、彼に何等恒久的生命ある事なし、常に「時」と共に、「人」と共に異變推移して止む事なきは自然の數也。然るにもし自然主義の文藝が此切實なる國民の新要求に應じて顯れたる者なりとせば、之れ觀過し難き重要難問題也、從て主義の名目に拘泥して徒らに其內容を忘れ去るが如き不愼重の態度は宜しくこれを避けざるべからず、現今一部の道德學者の如くに、頑冥なる傳習に固執して瘦廢せる掌に社會の大勢を防遏せんとするが如きは迂愚の至り也。意ふに彼等は聊かも該思潮の據りて來る所の根本の理由を明視せずして、急遽早忙殆んど何等の憑所もなくして此現象に對するが故に、所詮は道學者一流の僻見に陷り、現今の自然主義思想は單に一部の醉興者によりて文壇の一隅に火の手をあげたる以來一切の傳習を打破する排倫理、排道德、排理想、排慣習の虛言的思想なりとして又は、社會風敎を醜惡蠹害する反文明の精神に外ならずとして之を排し、防遏せんと勉め、其の據りて來る所以の道を討察せず、人類深奥の要求なる事を忘れ、進取の方法を講ずるを敢てせず、傳習的塞砦に籠居して出づるに戶なきに苦しむもの也。

塚原氏は近時社會の風敎の一種デカタンの風潮に傾きつゝある事を暗示し、「世は社會風敎の頽敗を慨歎し、男女學生の墮落を絶叫しつゝあるが、其の原因固より種々多樣にして容易に指摘し能はざるも、確かに文藝界に於ける自然主義も亦其原因の一に數ふべきものである」と言明せられたるも亦明に如上の僻見に陷れるものと云はざるべからず。ことに吾人の甚だ奇怪にたへざるは、氏は近來男女學生の墮落は（たとへ一部の理由として擧げたるものにもせよ）文藝界の自然主義が

其一原因を爲すものなりと速斷したる態度なり、如何なる觀察を下せば斯る謬見はなし得らるゝにや、察知するに苦しむと雖も、思ふに氏は現今の自然主義と、從來行はれし俗惡低趣味の寫實主義との間に幾何の差別的傾向を辨別しうる人なりや、從て現今の自然主義の作物が、少くとも今までの所讀書界の如何なる部分卽如何なる程度の讀書社會に依りて多く歡迎せられたりしかを看取し得る人なりや、予輩は斷言す、もし文藝上の作品にしてこれまで男女學生の思想幼弱なる點に投じ、當局者の謂ふが如き墮落的傾向を彼等の社會に誘致したる形跡なりとせば、其はむしろ過去十余年間幼稚なる讀書界を籠絡したる講談式似而非寫實主義の小說（幽芳の「寒潮」の如きは其好適例也）の與つて力ありしものにして、現今の自然主義（一部の讀書界には未だ其如何なるものなりやさへ知らざる）の思想が這般未熟なる讀者に依りて解釋せらるゝの日は未し、況んや墮落云々の事をや、こは敢て氏に對してのみ云ふべきにあらず、滔々たる現時の敎育家、宗敎家、道德家なる人々の、文藝上先づは許容するに足る丈けの知識と理解とを具有し、文藝と社會交涉の眞價を明視しうるもの一人もあるなしと言ふも豈過言ならんや（酉丁倫理所載高島、宮田、中島三氏の論參照）彼等の言ふ所言說徒に累繁なるにあらざれば、自家偏見の方式に固執して揣摩憶測を恣にせんとする結果、畢竟理論上の戲技に陷り、事々皆空論談議に流れ、實功の見る可きもの無し、社會萬般の事象はしかく彼等の曰ふが如く好都合に行くものならば、一代の風潮、文明世態の推移等は誠に論じ易き問題のみ、實に彼等が言ふ所の一言隻句なりとも今日の世に（未來永劫は尙更の事）實生活上の交涉を有するものならば、予輩は彼等が態度に就きてよしなき苦は言はざるべき道理なり、極言するに現今の倫理學者の態度は、彼等自らも其論の現實世界には何等の交涉を有せざる論議なることを自覺し乍らも、尙其知待しえたる過去一切の傳習學說を捨てゝ、新時代の要求に適合したる大生命の新道德を建設する敢取の勇あるなく、大毀骨立の體にて、詰らぬ意地立をなして世間體を胡魔化し去らんとするに似たり、あゝ何等の迂愚ぞ、陋劣ぞ、彼等の言論の社會風敎上聊かの裨益する所無きは言ふ迄もなし、彼等の自ら以て解釋し得たりと思惟するものは、その實、實際上には何等の解決も見ざる也、牛角を矯めんとして却て牛を殺すものは自らを知らざるものなり、これ大なる危殆なり、遮莫氏の言說に就きて尙ほ考ふる所あらざるべからず。氏は先づ自然主義の主張に對して公平なる判斷を下されたり、曰く「自然主義は文藝其者より觀る時は固より相當の理論の上に建設せられたるものであり、又文學者は其主義とする所に從ひて自由に其思想を發表し、其述作を公にするとは固より何等の非議すべきことではないのである。」と、是を以て見るも氏は、自然主義は一定の理論を根據として立てられたるものなる事を是認する者なり、しかるに氏はまた前說を非定して曰く、「文藝として自然主義の標榜せる理由や甚だ正々堂々たるが如きも、徒らに人情の自然を寫すことのみを勉めて能事終れりとなし、彼も自然是も自然と認め、甚しきに至ては材を色情狂の如きものに採つて之を自然となし、人性の自然に觸れたりと誇張する者が多いのである、此果して美を理想となせる文藝なるか、余輩頗る疑なき能はずである。」と、今日の學者が自然主義に對して一般に抱持する疑點は意ふに氏と同一なるものなり、而して氏の如上の意見を有するに就いての理由と見るべき者は、自然主義なるものの

文藝的價値より論じたるにはあらずして、寧ろ自然主義が一部分の社會に及ぼす影響の如何を其の根本となしたるものといはざるべからず、氏は卽社會敎育の爲め、國民道德の爲め多大なる害惡を及ぼすものとして自然主義を難じて曰く「たゞさへ情慾の自然に赴き易き靑春の男女をして斯の如く挑發的に情慾の自然を描寫せる文藝に接觸せしむるときは其弊害の甚しいことは必ずしも識者を待つて知るべきではない」と、されど予輩は謂ふ、如斯はこれ到底自然主義に對する有力なる攻擊の根據を形造るものにはあらずと、古來文藝と道德との關係を論じ、文藝上凡ての問題を悉く道德權威の範域內に於て說明し去らんとしたる傳習的迷妄は、今日は全く動かすべからざる眞理なるが如く思惟せらるゝに至り、世の論者の唯一の根據を此處に置くにあらざれば、文藝的價値の存在は全く無意義なるものゝ如く考ふ、これ既に大誤謬なり。文藝と道德とは其出發點に於て既に根本の相違あるものなり、否少くとも予輩は現今の自然主義に於てしか斷言しうるを信ずるなり、一は卽理想善を豫想し、一は卽實際眞に觸著せんとす、善美は必ずしも近世詩歌の重大なる約束にあらざればなり、故に現時の自然主義にして其目的とする所無理想なりと言はば或は無理想なるべく、非藝術的なりと言はば或は非藝術的なるべし、何の怪しむ所かあらん、「藝術の爲めの藝術」や、敎育、道德の爲め藝術は固より藝術としての絕對價値を有せざるは言ふ迄でも無く、苟も藝術的作品を以て悞樂以上、勸善懲惡以上人生の實生活と何等の交涉あらしめ關繫あらしむる有意義有生命のものたらしめんと欲せば、在來の舊套は一切これを打破し、凡そ社會百般の事相は其の性質の如何を問はず、事實として價値あるものなるが故に、其取材たるや美醜淸濁は素より擇ぶべきにあらず、凡て描寫の目的に適ひたるものは收めて以て作者が藥籠中のものたらしむるをうべく、描寫の巧拙、作者が態度の如何に依りて作品は美化或は醜化せらるるものにして、巧みに描かれたるものゝ又は事物の眞相を巧みに傳へたるものは作者が態度人格の如何と相待つて取材の如何に拘らず常に美なるものにして、一面美以上深大なる意義あり生命ある者なり。反之美其者を以て唯一の目的となせる藝術美は、畢竟抽象的概念の美たるに過ぎずして、美は卽美ならんも、固より人間の實生活とは何等の交涉もあるべからず、從て美其者を理想とせる文藝の恒久的生命なきは今更言ふを要せず、而て爰に自然主義の文藝は凡て此等の舊弊を打破して新なる時代の欲求に應じ、從來の主義理想を以て到底說明し得さるは實際問題の解決につとむる者にして、氏の所謂美感を與ふる自然、美感を與へざる自然と詩歌の對象に兩種の差別性を定め、論理的規約の下に事實を壅塞し去るが如きは、實相觀を主とする文藝の敢て取るを要せざる所なり。成程氏の如くこれを在來の傳習の範圍、道德の權威內に於て說明せんとする時は幾多の矛盾もあるべく齟齬もあるべく、『此の如きは文藝としては頗る劣等で之に對して最早や文藝と道德との輕重を論ずべき要を認めないのである』とも言ふをうべく、尙附加して『實に此の如き野卑陋劣なる文藝の存在は許すべきではない』とも斷言するを得べし、されどこは既に、社會の大勢を無視し、人類の向上性を度外視したるものにして、苟も人性の發展と社會文明の變遷とを明知し、經世の志ある達者の取るを欲せざる所なり。否な現今の敎育家、道德家は決して社會の大勢を認めざるものにはあらざるも、彼れ等は社會大勢の潮流に棹して一世を警醒誘導する

敢取の覺悟なく、進取の勇氣なく、一向ら傳習的堡砦を墨守して一代の風潮を防遏せんと欲するに急なるのみ、即ち氏自らも告白せるにあらずや、現代の人性に關する事實は決して教育家又は道德家の理想とするが如きものならず、否將來とても恐らくは教育家又は道德家などの所期するが如き狀態には到達せざらん、是れ畢竟人性の自然にあらざればなりと、これ何人も認めざるべからざる自然の趨勢なり、然るにこゝに氏の極言せざる處あり、氏は單に自然主義の取材及び描寫の点にのみ重きを置き、作者か描寫の態度及び人格の点に言及せざりしは、氏の論の薄弱なりし所以なりと思ふ。自然主義の作家にとりて最も重大なるは作者其人の人格と、作物描寫の態度となり、作者は如何に其主義を揚言し、主張を大ならしめ、自然主義の特色を云爲すとも、もしその態度眞面目ならず、人格の点（誤解を避く）に缺くる所あらば、その作品の文藝的價値なきは固より論なし、凡て作者の實相觀は作者其人の態度と人格と相待つて藝術的作品の完一を保し得べき也、之れ彼のドストエフスキー、トルストイ、諸家の作物に見よ、彼等が描ける社會の暗面のよく作物の特色をなし、鍼を讀者の心臟に下す所以のものは、蓋し彼等が人格と自覺的意識との然らしむるに外ならず、もし彼等に何等の根抵なくして一向實相に拘泥し、社會の暗面に沈潛して、所在(あらゆる)種類の罪惡、惡臭、迷惑等を撈ひ來り、漫然之を讀者の面前に掲げたりとせんか、假令彼等は如何なる主義を標榜し、如何なる主張の下に隱れたりとするも、徒らに社會を蠹し、醜惡ならしむる譏は免れざらん、かくの如きは是れ決して自然主義其者の目的にもあらざれば理想にもあらず、もし現今の我が自然主義に如上の惡弊ありて、氏はこの惡弊に投じて辯難の矢を放たれたるものとせば、予輩大に氏の言を諒とせざるべからざるも氏はもし現今我自然主義の未だ進步發展の過程にありて多くの幼弱なる点、誤解曲解の点の免れがたきを忘れ、直ちに其不備の點を擧げて以て自然主義其者の價値を速斷せんとしたりとせば、これ早計の甚しきものなり、予輩今氏の言論を通讀するに自然主義に對する氏の見解には尙一段の考究を要すべきものあり、此れ尙氏の猛省を煩さゞるべからざる點也。

氏は最後に文藝の自然主義以外に自然主義傾向を根抵とせる社會上の惡影響として、頃來新聞記事の精細に流れたる事、婦人病に關する問答欄の婦人中心の雜誌に顯れたる事、醫學上の新發見の專門家によりて殊更に社會公衆の前に發表せらるゝに至りたる事（こは某醫學博士の「情慾抑制弊害」と題して某公會席上に於て發表したる學術上の演說を指す）等を擧げられたるが、予輩は未だ如上の問題に關して定見を有せず、如斯問題を社會教育の上より又は國民道德の上より論じたらんには、一層面白からんと思ふものなるが未だかゝる十分なる研究の結果に接せず、兎に角社會風潮の益々現實主義の狀態に傾きつゝある事爭ひ難き事實にして、傳來一切の主義理想の光燿は危くも此の暗流の一波一浪の間に明滅して國民要求の新なるに從ひ其暗底に沈沒し果てずんば止まざらんとするに似たり。而してこの排理想、排道德、排理論、排宗教等襍然として起り來るものは一面に於て眞生命ある新理想、新道德、新主義の設立を望む「新國民」內奥の要求、絕叫の聲なり、されど宜しく誤解する勿れ、彼等の叫びは徒らに野に叫ぶ啾々の響にあらず細流江をなして岩に激する響なり、予輩は該傾向の社會風潮に顯れたる特種的の現象を以て毫も悲觀すべき現象ならずと思ふものなり、予輩は此人性內部の必然

的發展に伴ふ現代の思潮を論ずるにあたりて、如何にこれを防遏すべきかは其の取るべき方針にあらず、むしろ如何にこの風潮を解釋し、この風潮に順應參加すべきかは正に吾人の攷究すべき主要の要件なり。予輩は此點に關し、現時の倫理學者諸先生の一大猛省を乞はざるべからざる也妄言甚多罪。

盡日尋春不見春、　芒鞋蹈遍隴頭雲、
歸來笑撚梅花嗅、　春在枝頭已十分。
（鶴林玉露）

文苑

關ケ原

曾根東

夜はほの〳〵とあけた。

汽車は今關ケ原を通つて居る。

美濃路の山々にもすでに雪がつもつた、枯れた雜木林は茶褐色に沃えた黑き畑を點綴して居る、朝げの煙の長く迷へるあたりには寒鳥聲なく消えて、野徑をはしる細流霜にむせんで居るかのやう、寒菊のさびしくゆらいで居るのもみえ鼻息白くふき立てゝ小さくなりゆく人と馬との影もみえる。

そのあたりよ、ありし世には屍、山とつまれ血は河と流れたのであらう、名殘は今も山なす陶器の破片となり血と赤き土塊となつて居る瓦の斷片をみては緋緘よろひのさね板が目に浮び、數百星霜の雨風にあばき出されたものゝやうにも思はれる　白刃とみえたのは霜にきらめく枯枝で明星の殘光亂るゝ野水の畔にはいかものづくりの二三騎が駒に水かふまぼろしもみえる、　木枯の音矢さけびとひゞけばかなたの森の梢のゆらめきは旗さしものゝそれにもまがひ、しのぎをけづるすさまじい有樣もあり〳〵とみえる。

車は瞬時にして古戰場をあとにした。　自分は成るべくんば少くも一晝夜ぐらゐ、この原上の冬枯に懷古の詩卷をひもときたいと思つた。

猿も木から落ちることがある、

不世出の英傑豐太閤鵬圖を抱いて明韓の肝を寒からしめたことは寒からしめたが其のあまりに大きすぎたゝめかへつて自家長久の遠慮なく、つひに二代にしてその原上の霜と消えた恐らく太閤泉下のうらみはこの原上の一敗より外にはあるまい、德川覇府三百余年の基礎はこの原上に忠勤の骨をさらした三河武士の功績である、東照公、白玉樓上のほゝゑみは蓋しこの原上の一勝より大なるものはなからう、

もし豐氏の末路に熱涙をそゝぐものと德川氏の隆盛に歡喜の笑をもらすものとが此の原上に落ちあつて、ありし世の事々をたもひ出したらば恐らく何等の活劇なしに別れることはあるまい。

降りもせんばかりの星月夜木枯すさむ折から數千万の靈火野上にもえて相ひたゝかふ時、必ずや大きな二つの靈火が激鬪して止まぬであらう。

思へば今も古も白刃の巷、阿修羅の野は幾多悲慘の泉の湧く所である　滿州の大野に砲聲はやんだが慘憺たる活劇は今もなほつきぬのである。

あゝ哭して天涯をのぞめば天地も爲めにうれへ草木も爲めに凄悲するものいつの世にありてか絶えるであらう。

然も世は、平和てふ假面をまとうて居る、まとひ方のうまいのが文明國である。

世に戰爭がなかつたらあゝどんなによいであらう。

過去の歴史は眞の人生の表現ではない、眞の文明國人はまさに眞の人生を表現する歴史を未來につくるべき任務がある、

自分はまたも悲觀をはじめた、

思へばわが友は旅順で歿したのである、わが友の父は奉天でなくなつたのである、さういへばわが祖先の父兄か朋輩かの少くも一人は關ヶ原の露と消えたにちがひなからう。　（終）

盛臻上人華甲壽序

赤井直好

天台沙門盛臻上人、住於紀州粉河寺、聲望頗高、拜夫西國大士者、兼接其導化云、頃者盛照長田二師相謀、欲爲其華甲之壽、來徵余言、余雖未謁上人、知盛照師於東京、以其聰慧好文、亦想見上人之德風也、因擧蒙叟所稱、長於上世、而不爲壽之言曰、壽在後世、而尤可喜、如上世、則其政簡易、其民醇樸、夫簡易則無累、醇樸則寡欲、寡欲以滌其心、無累以忘其迹、長生久視、自至而不足尙也、及至後世、物有忌諱、人多技巧、竭智焦思、嗜好隨出、不汨性傷軀者殆希矣、上人夙極內典、死生存亡、不經於心、朗然獨醒、是其所以得世壽、而値蒙叟之讚歎也歟、余嘗南遊紀州、過和歌浦、謁玉津島祠、遂循紀水、登高野山、途經粉河驛、詣所謂粉河寺、拜其觀音大士、當時蒲質尫弱、數艱病苦、而今也日加健勝、不復存舊態、豈無爲大士及諸天之冥護乎、佗日欲再遊紀

州、拜其佛恩、而謁上人、問長生之法、進壽其古稀、則方今之時、余有未足爲上人言華甲之壽者也、明治丁未五月、

一炷

鈴木青花

詩のなやみ

おのが涙を灑きてぞ人の涙は誘ふべし
お丶詩人よ、搖蕩の潮、高鳴る心臟こそ
靈妙き想の宿影す、嚴の齋場の鏡かな、
まこと、懊惱をよそにして歌の護符のあるべしや。
驕慢の雫たゝへたる詩の水甕をたとふれば
柔毛と散らふ吹上の、音なの飛沫か。あ丶あらじ
渴きに堪へで『死の湖』の潮泡汲むにまさりけれ、
瞼に露を宿さでは、たゞざれ歌に過ぎざらむ。

詩歌の神は——日の神ぞ、汝れが奴隷にあらじかし、
うたを獵るてふ輩こそ神に狩らるゝさを鹿の
胸に獵矢をえてしより、まことの歌は逝れ。
想の『權力』や、胡籙を背に負はす神のわざ、
傷手に惱み唇もらす叫喚よ。かくて同胞が
むね、汐騷に打ちぞよみ涙ぞ絞る、詩の源泉。

——Daute Gabriel Rossetti.——

頌歌者

雪衣つけぬ。——大寺や、そゝる高塔はた御堂、
落葉はさむき菩提樹の冬枯空の並木路、
往來とだえし片小路、大路はいよゝ氷りつゝ
夜の翼の羽ばたきに深まさりゆく夕凍や、
物わびしらの頌歌の室の宵の灯影は仄ぐらう
狹霧こめてし滄溟の漁火見るに似たりけり、
御寺籠の法人は夢に搖らるゝ風情して
誦經の聲も懶げに香爐の下に集ひたれ。
あゝ、夜寒なり。血は冷えて睡眠いざなふ折しもあれ

聽け、節曲早の最高音は、雲雀の聲音さながらに
靜寂破りつゝ、炎ともゆる、心の動悸、呼息の波動
圓天井や廻廊に響き返して漲りぬ、
鴉黑なる夜の領を、こだまは高くいや高く
法苑林の奥深き望の華座と憧るゝ。

——John Addington Symonds——

懷郷

一、

わが故郷は春の空、雲雀なく野の陽炎や
宮居櫻がそよ風に花吹雪する日ざかりを
產土神の廣丘に人なだれうつ祭の日、
錦繡の襦袢の若衆が囃子につれて笛太鼓
十三輛の山鉾を、練るや大路のゆきかひに、——
瑞葉がくれの黃鳥の日永を歌ひ暮すごと
「愁ひ」「歎かひ」忘らるれ。あゝ春深き花の日の
長閑、——こふるわれにあらじか。

二、

わが故郷は葉月の日、白銀色に照り白らむ
末下りの白雨に杜の香、搖れて黃昏るゝ
若葉がしはの木暗より、螢飛び交ふ江の岸や、
闇黑の衣に纏はれて撒くよ御空は金砂子。
時こそ來つゝ夏川に艤裝して鵜匠らが
照らす篝火に水明かみ、簗ぼこりする鮎とりて
振りさけ見れば月じろむ。あゝ行々子の葦になく
良夜、——こふるわれにあらじか。

三、

わが故郷は薄日影、梔子色の晩秋を
繼鹿尾詣での少女らが家路に急ぐ夕まぐれ、
頽御堂の草わけて公孫樹の下に來て見れば
黃金葉ゆたに飜し王者と立てる裸木の
梢にかゝる夕月を碎きて咽ぶ秋の水。
はた、鐘の音の靑びれに蜻蛉とる子の群去りし
古沼を狹霧たち迷ふ。あゝ時雨月、末枯野の
靜寂、——こふるわれにあらじか。

四、

わが故郷は竹柏の木の朽葉散りしく朝濕り、
古城の壁に枯れすがる女蘿つと落ちて
蕭、篁簀の音も低に、そゝばしりゆく冬の日や、
木枯し荒む霜の夜を、ありし樂所のうつぼ樹に
片われ月の影浴びつ舞ふよ、林精は白衣して。
さりや、御濠の色にぶみ、萍草萎えて黄鍋の
姿も見えず、水錆びぬ。あゝ物寂びし城墟の
嵩高、――こふるわれにあらじか。

五、

今宵さしぐむ月しろに邊浪たゆたふ北の海の
蜑の漁歌に聞きほけて荒磯が丘にたゞすめば
そゞろに浮ぶ、――南や、淡雲徐に峰越する
濃青の空の微笑まひ、――生れの里の家族人。
さもあらばあれ、「追懐」よ、露の朝扉に見たくりの
嬬び姿や眼のうるみ髪のかゝりば、――これやかの
深山がくれの常井かげ、月見花草、若やぎの
清淨、――偲び胸は躍りぬ、

薄光（和歌會）

其月

はなれ居の思切なみともすれば君が名よびつ
返答眞似びつ
丹波路や、廣き園爐裏に榾焚いてかち栗くべ
て旅人もてなす
大森の海見る園の若草を敷きて語りし春もあ
りけり
湊入りの水主先づ指すや長柄の渚に並ぶ長者
が御藏
黄桃花毛に具鞍置いて吾行かば妹が驕りの心
搖らんか
ゆくりかに御返事たびぬ幾日降る雨の夕を虹
見る心地
緋櫻にひとりもの思ふ人影や西八條の宴する
夜半
此の朝げ三十六峰島なれや谷てふ谷にかすみ
こめつゝ

木瓜

秋風に見えずも黒きさびしみを喰みて行く如
落葉するかな
ねがはくば一鳥なかぬ亞弗利加の森にありた
き雨ふる日かな
おり立ちてふむにはをしき春の草障子ながら
にめづる家かな
珍らしと相見し日かな人とわれとかたみに老
いぬ夢ならまほし

わが心たゞ一瞬のゆきかひに珍しと見し人は
往にけり
行く春の愁を花と云ふ花の蔭に立たせて撞く
夜の鐘
春の野は一夜ばかりに天軍の火さしたるらし
紅き花咲く
わがこゝろ君が瞳の赫燿にあめつち焦す火と
し燃えけり

光雄

鐘の音にいなゝく駒や聖堂の丘をめぐりし春
のわか草
白駒に紅鞍置いて君ひとり野を行くと見し宵
の夢かな
ゆふやけの光に赤む姿見のかゝみにうつる鳥
數へ見る

雉泉

宴はてゝ手助けに來し一群の山賊めきて爐を
かこむかな
鯨うつ銛を手にせるあらくれのはだか男に霰
ふるかな
わか草に駒を放ちて野と空のたゞ綠なる中に
眠りぬ
珍しき流人興して島の王椰子の實を割くもて
なしぶりや
うぐひすは陣に居列ぶ三十の若き頬せる騎士
に啼きけれ
日も夕斑鳩來鳴く鐘樓に背のびして見つ行く
春の奈良

紫水

春をすねて岩間に生ひし瘦草の花にとまりぬ
名も知らぬ虫
三年振り故郷にかへる坂路や我が家の藏の白
き壁見ゆ

磨墨

神巫は幣をさゝぐと白衣して若草ゆきぬ春日
の末社
壁下地足代わたせる經藏に鶯來なく春の大寺
ものゝ二騎白馬うたせて大宮を上りにいそぐ
霞の中を
春風は馬市すなる三春野の駒のいばえにまじ
り來にけり
夜半亭春を名殘の灯に連歌興がる几董と召波
櫻人素見ぞめきの祇園の夜一念らしき新發意
に逢ひぬ

和一

供具して直衣姿の貴人が海見ておはす若草の
岡
奈良の旅ふと見出でたる古池に塔影ゆるゝ夕
月夜かな

白汀

ともすれば寂しき影の身にそひて涙流ぬ行く
春の日や
わが胸は火を蹴る天馬綱切れて入らん戸もな
き君が石室

み

つれづゝを蒔繪の盆に玉霰職の女房のたいま
つりけり
近江のや國の大司が國めぐりゆふべ駒やる瀬
田の長橋
大宮のちひさ小舍人あをうまによきうまあま
た率ゐても行くかな
大淀や風わたらぬと綱手して春の逝く日を上
る船かな
なほざりの半歩だにせぬ橋がゝりすり行く方
は鏡の間かな

春五題

紫影選

春雪

春雪や　草の戸　細の　牡丹の芽　紅芙蓉
春の雪　三月堂の　梅　遲し　同
お小姓の　しのび　姿や　春の雪　同
温泉の宿や　傘借りて出る　春の雪　同
春の雪　精養軒の　灯かな　淵村
淡雪や　みどり兒　負ふて　宮詣　美島
温泉の町の　朝の絃歌や　春の雪　雨峰
婚禮の　馬に高荷や　春の雪　秋雨
春雪に　閉す　塔下の　賣茶店　同

春寒

野あるきの　日蔭となれば　春寒し　紅芙蓉
鶯の　糞づまりする　餘寒かな　同
老二人　餘寒を　談る　火鉢　哉　同
春寒き　支那人　町や　韮　鬻ぐ　美島
落第の　肩身　狹さや　春　寒し　同
窓の戸を　ガラスに變へて　春寒し　稻花
春寒き　雨を　素足の　女かな　稻花
髯剃つて　聊か春　の　寒さかな　京木
春　寒き　山紫水明の　書齋かな　淵村
林中の　一株の　梅に　餘寒かな　墨村
平凡に　一日暮らす　餘寒　かな　蛤城
人乘らぬ　二錢蒸汽や　春　寒し　雨峰
野に放つ　子馬の尻や　春寒し　秋雨
病妻　の　櫛卷髮や　春　寒し　同
二三子と　舞雪に風して　春寒し　同
丘隅に　鳥が來て鳴く　餘寒かな　同
淺草に　凶の籤　得て　春　寒し　同

山笑ふ

居留地の　山の端笑ふ　港　かな　美島
麓なる　アイヌの村や　山　笑ふ　同
蕃人の　歸順の式　や　山笑ふ　雨峰
業成りて　村に歸れば　山笑ふ　同
海にみつ　大和島根や　山笑ふ　京木
酒旗の風　をちこちの山　笑ふかな　秋雨
男山へ　た願　ほどきや　山笑ふ　同
五十三次　草鞋日記や　山笑ふ　同
摺鉢の　底の　甲府や　山笑ふ　同

鷓鴣

鷓鴣鳴いて　懷古の詩篇成にけり　京木
北へゆく　流人に啼きぬ鷓鴣一羽　同
亡國の　春猶淺く　鷓鴣のとぶ　墨村
鷓鴣とぶや　古城の壁に　白き花　同
鷓鴣とんで　欵乃もなく　歸り船　蛤城
鷓鴣の影　戀しき空を　眺めけり　紅芙蓉
鷓鴣飛ぶや　胡地に日暮れて麥の風　秋雨

椿

雨の蜂　椿の水　を　こぼし去る　紅芙蓉
犬眠る　門に　つら〳〵　椿かな　美島
村口の　藁小家　みえて　赤椿　墨村
石の如き　蕾　の　數や　白椿　稻花
鎌倉に　嘘の　古跡　や　椿山　秋雨
逢ふ戀の　椿　林　や　吉祥寺　同
椿山　まともに　海の　入日かな　同

四高俳句會席上即吟

冬木立　吾に　前後す　何處の犬　紫影
煮凍の　もとり初めけり　寒の雨　同
藁焚きし　跡　黑々と　寒の雨　同
河豚汁に　三分五厘の　浮世かな　同
年内に　爲換の着かぬ　寒さかな　同
金借りに　往て叱られし寒さかな　同
もみ碎く　海苔の　香や　掌　同
釣枝に　灯入れの　月も　朧かな　同
銀紙の　蝶や　狂女の　後先に　同
長唄の　太夫　居並ぶ　櫻かな　同
さめて思ふ　昔の戀や　夜半の春　同
緣日の　愛染樣や　春　の　宵　同

暖かや　足でつき出す　置炬燵　紫影
義理にきく　長き讀經の　寒さ哉　靜池
入りのなき　寄席の二階の寒さ哉　同
あちらむく　大佛にくし　冬木立　同
佛事する　家靜かなり　寒の雨　京木
越の鳥　北せず　春の　尙淺し　同
暮れぬまに　豆まきしまふ廓かな　同
子なき人の　家はついなの　靜かも也　同
桃咲くや　寄木細工　を賣る小家　同
春の夜やたしろいくさき化粧部屋　同
雪達摩　川へ落して　しまひけり　溯村
豆打つて　一家炬燵につどひけり　同
雪解の　大河を汽車で　渡りけり　同
近道を　畦からゆけば　田螺なく　墨村
還暦の　春まつ　人や　置火燵　美島
春淺き　瀉の　淺瀬や　蜆　取り　同
卒業の　春まつ人や　書にこもる　同
畦道に　春霜　わきて　田芹かな　美島
芝居はねて　下駄とるひまの寒哉　雨峰
空駕籠を　下に据えたる　冬木哉　同
北風や　駿府通ひ　の　急飛脚　同
お降りや　松に　聲なき　奥の院　同
お降の　厩に　眠る　神馬　かな　同
監獄の　敷地の　砂利や　別れ霜　同
山陵の　修理　半ば也　夕雲雀　同
寒の雨　垂氷傳ふて　落にけり　醉巴
北風に　厚子破れし　舟子かな　蛤城
みる限り　田の面に降りぬ別れ霜　同
寄居虫のつゝけば貝にもぐるかな　同
夜道して　湯につく道や田螺なく　孤月
スケッチの人となるまで　田打かな　同
北風や　犬が　鼻ひる　獵戻り　秋雨
麥を蒔く　人みて立つや　廓駕籠　同
鴛鴦や　妃の　宣下ある　関氏邸　同

雪解水　道に　あふるや　寒の雨　秋雨
火まわしの　灰がちになる寒さ哉　同
寺子屋に　早く誰來て　雪達摩　同
江戸は春の　一月場所の太鼓かな　同
れ降りや　しづかに遊ぶ　女の子　同
紅梅の　借家なつかし　木の新保　同
たのまれて　醫者へ走るや田打人　同
頭巾　きた　にせ侍や　宵の春　同
雲雀野や　さがしにもどる落し物　同
雲雀飼ふ　鑛山町の　床屋かな　同
綿弓に　綿の　埃や　暖か　に　同
河豚買ふや　博奕にまけし　袂錢　紅芙蓉
城跡の　空濠　寒き　冬木かな　同
北風や　早く灯を引く　濱の宿　同
麥蒔や　阿呆鴉が　畠の　木に　同
近江路に　入れば麥蒔　蜻蛉かな　同
水樓の　欄干　赤し　鴛鴦浮寐　同
妓夫　禿　寶引す　なり　晝の雨　紅芙蓉
お降りや　小松の　雫　竹の　露　同
雪解の　山を　觀音　廻り　かな　同
春淺し　軒の　雪割る　日の表　同
教室の　窓の　日　背に　暖かき　同
春の夜や　たゝみ終りし　能衣裳　同
ころ〳〵と波にゆらるゝ寄居虫哉　同
二幕目　廓の　花に　喧嘩かな　同

紙雛のさうゞしきよ立すがた　其角
瀧臺もひしげと雛子のほろゝ哉　去來
不思善と打ち不思惡と打つ田かな　霽月

北辰時評

戊申倶樂部に呈す

さきに辯論の練習を以て組織せられ、その光明多き門出を祝せられたる我が金曜會は、頃日瓦解し新たに盟を起して戊申倶樂部を設立したりといふ。其の目的は級の團結をはかり、併せて從來の如く毎週一回辯論を練るに在りと。吾人これを耳にして愈よろこばざるを得ず。敢て余が喋々を俟たずと雖も、一部生の運命が、辯論の才能(タレント)に左右せらるゝの甚だ寡からざるを思はば、一日たりとも忽諸に附すべきにあらず、これを練るは卽ち未來の活動に基礎を作らしむる者なり。これ迄この方面に心がけたる人の多くを見たるも宜べなり。而も級の團結に至つては、說く者またあらず。我が校一部の出身諸君が、その大學より寄するの書に、皆その級を同うしたりしもの丶間に、團結なく統一なきを憂ひとし悲みとせざるは無し。これ實に金曜會がその目的を一變して戊申倶樂部の名を以て顯はるゝに至りし所以なり。さればこの團結は來る六月を限つて解散せらるゝにあらず、尙進んで大學に到つてもこを持續して、各自の意思の疎通をはかるといふ。嘗て某校出身者輩が相牽ゐて傍若無人に跳梁するを慨したるの士は、これを以て痛快なる擧とし、其の發展に對して大に囑望し來り上るの日を待ちつゝありと。東都に四高主義(イズム)のふるはざるや年既に久し。兄等それ輕佻に走らず眞にその實を揚るに勗められよ（某人）

演說部に與ふ

久しく不振の名を耳にしたる我が演說部は、近來突如驚くべき活況を見るに至れり。嘗ては猫額大の物理教室に、十名の辯士と同數の聽者とを得て、以て不足ながらも成功となしたる我が演說部が、語學會にも劣らぬ聽者を至誠堂に集むることを得るに至りしはまた誇るに足れりといふべし。惟ふにこの發展を來たせし所以のものは、勿論一二の理由に歸せしむること能はざるべく、又半年一歲の短期によつて來れるにもあらざるべきも、吾人は尙これを以て我が校六百の健兒が從來の狀態に滿足する能はざる念の遂に驅つて諤々の言となり、よつて以て一統せる輿論を惹起せしめ、陳滯に傾かんとする校風に對して鞭撻を加へんとする各人の自覺が、ひいて今日あらしむるに至りしことの主因たるを信じて疑はず。四高未だ早熟せず、未だ老衰せず、又以て人意を强うするに足るべし、辯論部の消長懸つてよく一校の盛衰を卜するあるを思はゞ我が部近來の活動進步は、擧校以て祝賀すべきことならずや。

斯くの如き大勢の下に在る我が演說部に對して、只一の遺憾とする所のものは、委員諸君の不熱心これなり。余は敢て苦言を呈せんとして云爲する者にあらねど、その前學期に徵し、その今學期に徵して、事實のこれを證明して余りあるに於ては、又默せんとして默する能はざる所なり。かのプログラムに在りて而かも一言の斷りもなく閉會を告げたる某氏に對して、何故に登壇せしめざるかを詰りたる某氏のありたるごとき、辯士の熱心思ふべし。先きに第二回をひらくやプログラムに載るの士三十有一名。而して實際登壇せるは十余名に過ぎず爾來今日に至る間一箇月を經過せんとして何等催しあるの風聞に接せず、遂に尻切れ蜻蛉とならんかを疑ふ。祝賀すべき我が演說部はかくの如くして自らその發展を阻碍せんとするか、好んで自滅に

陷らんと欲するか。委員諸君乞ふ大に反省するところあれ。この期を失してまた我が部の活動は見るべからざらん。聞くならく一部一年には乙、丙、丁クラス皆辯論練習の目的を以て新たに會を組織し、一部三年には去年來の金曜會愈隆盛を極むといふ。辯論の勃興かくの如くそれ大なり。この時に當つて委員諸君は寡くも月に一回位は演說部の開催に尽力して可なるべきを信ず。然らずんば、鼎の輕重を遂に北辰會演說部に問ふの止む無きの期に至るべし。而して今や其の期の遠からざるを思ふなり。委員諸君それ覺醒するところあれ。嘗て催されたる公開演說のごとき、甚だ好結果を得たるに非ずや。復興せよ活動せしめよ。舉校擬國會を催すも亦面白からずや。兄等その荷の大なりといはゞ、余等は敢て勞を取るに吝ならじ、只わが校の士をして「腹ふくるゝ」の歎に出ださしむる勿れ。

一言演說部に與ふ。　安言多罪（愚物）

嫁がどうしても衣服を下婢にたゝませなんだのは衣服の表は立派なれども、其裏が切れぎれの木綿であるのを他人にみらるゝのか嫌な爲め也、里に歸りては之を脱ぎすてゝ置くのを母のたゝむにまかすことの出來るのは母は裏も表も能く存じて居るが爲也、

まだすべてをまかすことの出來ぬのは大慈大悲の親樣を他人と思ふ故ならずや

秀存語錄

雜報

村上先生を悼む

明治四十年十二月十一日、灰色の天ひねもす白雪を降すの時、村上先生玉樓召すありて靜かに道山に歸り給ふ嗟乎哀哉、思ふに先生の我校に入らせ給ひしは實に明治二十五年八月也、爾來十有六歲の永き間、日夕後進を誘掖薰陶せらる。先生の經典を講せらるゝや懇到にして引據該博、文を論せらるゝや切實にして精微を極む、旁々常に諄々として人倫の大道を說示せられしを以て先生の講莚に列るもの深く厥德を敬慕せざるなし。故に我校風大に發展し文運一時に振ふ、殊に我北辰會誌の如きは毎號先生の詩文を掲げて以て誇としたり、然るに一朝先生を失ひ奉る、獨り吾等の悲痛のみならず、亦汎く我國詩文界の恨事として痛哭止む能はざる所也。

頃日先生の遺稿函峯文集を拜讀して、四高に在らせられし當時の文藻に及ふに、校風嚴として吾等に迫り、師情最も厚きを覺ゑ、先生生前の姿を描き唯〳〵卷を抱きて涙あるのみ。かの洪々たる犀水の流、蒼々たる白根の山も幾度か先生の詩囊に入りしもの、又先生と相別れて憂色あるものゝ如し。今や花は滿城を埋め野も山も床しき春の裝して立てる今日このごろ、吾等を三峽の危きに殘して、此の世の春に背き給へる先生を懷へば、吾等は只限りなき感傷の涙を禁ずる能はざる也　（かたし）

洛陽の快戰

野球部庭球部相携ゐ南下す、

吉田原頭の惡戰は忘れもやらぬ去年の今日このごろ、當時六百の校友、涙を揮つて此復讐を

誓ふ、無念裂帛の響尚耳に存す、今春飛牒して戰を挑むや彼應戰を快諾す。殊に今年三高の校庭に會するものには曩きに五高を屠つて勝に誇る七高あり、南海四百里の蘇鉄國より、入洛せんとす、一高も亦昨の屈辱を洒がんと南の方、京洛の天を睥睨しつゝ鉄路百里、三高に挑む、六高その比隣を以て此試合に加はるは無論のことなり、野球部あつて其實を失へる二高を除算すればデフアックトに全國高等學校の聯合マッチと見る可し。會するもの悉く天下の俊髦、櫻雲菜花山野を飾りて蜂蝶の心もすゝろなるの時、戛々たる熱球の響、參差たるラッケット觀者拍手の音と相交る、壯觀眞に想ふ可し。

常なきは戰の道、俄かに其勝敗を斷し難きも我撰手の意氣天を衝き腕鳴り肉躍る、銀鞍に跨り長策を振つて覇を天下に稱へんとす又難きに非らざるものあり。あゝ兩軍の戟端相觸るゝの時、飛電來つて北辰の學窓を撲つもの果して何か、またるゝは陽春四月洛陽の復讐戰。

（かたし）

無題錄

（一）

○吾人は現實なる語を聞くたに愉快なる心地す。之に反し、空なる一語を唾棄せむとす。一は堂々たる陣皷の如く、他は痴者の醉歌の如し。

○吾人は烏の如く鳴く能はず。馬の如く聞く能はず。影の如く活動する能はず。ニュートンが落つる林檎に注ぎし眼は、眠より醒めし稚兒が夢中の物を空中に探ぐるの眼にあらざりき。

○現實は眞面目なり。嚴肅なり。苟も、現實の眞相を洞觀し、胸中一道の信念を得たる者は、是ぞ、人世の樞機に參し、實在の世界に向つて眼を開ける者といふべし。

○吾人の活動は主義と希望とを根柢とす。而して、是は現實の赤裸々に觸れずんば得る能はず。

○つら〳〵世態を觀ずれば、果なき幻影を追うて、笑ひ、泣き、悲しみ、歡び、怒り、悶ふ。一場の悲劇喜劇。一度び沈思して瞑目せば、是等のもの忽ち消えて、胸底深き所、重き響聞ゆ、浮き世は果なからざるにあらず。されど、浮世に惑ふ者は更に果なし。

○西人曰く「物、其の物には價値少く、人が之に附するの意味が之を貴重にす。」と。吾人は之を否定する程に悟入せず。之を可定する程に愚ならず。余が、此の言に遇ふて惑ひしと一再に止らざる也。然れども思ふ。人は眞理のためには勇敢なる戰鬪者たらざるべからず。吾人は現實の暴露を恐れて、假りに暫く空想の中に安立の影を追ふの臆病者たるべからざるなり。

○吾人の肉体が此の地球てふ一大土塊の上にある如く、吾人の精神も亦現實世界の大磐石の上になかるべからず。

○吾人は涙を有す、泣くべし。笑を有す、笑ふべし。然れども、吾人の泣くや、直ちに、人類悲痛の涙ならざるべからず。吾人の笑ふや、直ちに、人類歡喜の響ならざるべからず。

○吾人は春より秋に入り、赤の世界より白の世界に入るべし。

（二）

○幸か不幸か、吾人は彼の宗教なる者を信ずる能はず。神の恩惠にあづかるを得ず。神の子とも成るを得ず。然れども吾や樂し。我が心や堅なり。我が周圍には家庭あり、社會あり、國家あり。吾人は此の中に活動し、安立す。

○宗教は虛僞に美衣を着せたるものなり。金銀箔をぬれる泥の舟なり。是を以て人生の海を渡らんとす。明識の士の敢て爲さゞるところなる

べし。

○宗教は方便なり。是を必要とする人情國性を有するものは已むを得ずとするも、我が日本は幸福にも、之を必要とせざる國なり。日本國民は元來想像に貧しき國民なり。現實的國民なり。日光的國民なり。生々的國民なり。かゝる國民は宗教を信仰し得べきものにあらず。然らば宗教の外に國民のオーソリチーとする所のもの無きか宗教を信ぜざるために我が國民の德性劣れるか。否我が國民は萬國無比の國体を有す。萬國無比の歷史を有す。此の國体歷史の發して日本主義となれるもの、是ぞ、吾人が提げ起たんとする旗幟なり。かゝる鮮明なる旗幟の下に集るもの、何ぞ迷信的宗教に依歸するを要せむや。

○宗教は美なり。世界主義は偉なり。然れども宗教の迷信にして、世界主義の空想なるを如何せん。トルストイは世界的大哲なり。而も一個白面輩の信を得る無きは果なからずや。

○現今我が國に於ける宗教は全く無能力なり。彼の宗教信者と稱せらるゝ輩が、彼等が宗教信者たるが故に、特に、爲し得たるの善事は一もあるなし。吾人は、彼等の失德腐心を大呼する程に大人氣なき者にあらず。彼等は元來我が國体民性と宗教との間にある一大障壁に氣つかざる無明の徒なり。國民の信據すべきもの他にあるを顧ず、假定の上に立てる無根のものに安心立命を見出さんとする者なり。かゝる薄志の徒の品性又思ひ見るべからざるか。

（三）

○修め易きが如くにして難きは常識なり。さほど、目に見ねて必要ならざる如けれど、大に重要なるは常識なり。吾人は之を以て、天才を律せんとする者にあらず。されど、普通の人に之なくば大に間のぬけたるものなり。學に於て深奥の域に至れる者多し。一身の道德甚だ堅固なる人多し。されど、常識の圓滿に發達せるは鮮し。

○一生を書箱の虫となりて終らん者は、常識に欠くるあるも、大なる不便なかるべし。祖先の遺產を受け繼ぎて旦那樣暮しを爲さん者には大なる不都合なかるべし。されど、苟も赤手實社會に投じて、小氣味よき活躍を試みんと欲する者は、大に之が修養に盡さゞるべからず。

○三寸の舌よく雲を呼び、五寸の筆よく五彩を發するも、苟も常識の根底薄弱ならんか。空しく空吹く風と聞きなされて、何等の反響をも社會に生ずるを得ざるなり。

○常識的ならぬ人の論議は聞くもまだるし。徒らに學問的の語を幷べ、神秘的の文句を語り、脫俗の言を吐くと雖も、吾人は遂に彼等が何故にかく論議するかを知る能はざるなり。

○常識は決して華美なるものにあらず。常識の發達せる人も外觀さほど偉大なる人とは見ねず。常識は精神の米の飯なり。酒菓の美なしと雖も、之なくば人は一日も完全に活動する能はざるなり。

○圓滿なる人格は其の一要素として常識の發達を要す。福澤翁の人格は大なりき。而して彼の常識は又豐富なりき。

○吾人をして最後に一笑話を揭げしめよ。我れ一日、我が四高附近の一雜貨店にて、ペン先き五本を求めんとし。價を問へば曰く五錢なりと更に曰く六本ならば四錢五厘なりと。其の故は一本づゝならば一錢、十二本ならば九錢なればなりと。是を沒常識として笑ひ得る者今の社會に於て甚だ少きを嘆ぜざるを得ず。（山下榮次郎）

部報

劍道部報

○寒稽古終る

雪に追はれ寒さに攻められ、太平の春四民炬燵を擁して睡ると深し。只有、劍道部の志士疾風の如く白雪を蹴つて無聲堂に趨せ參し干戚を執つて舞ふと數刻、やがて胸を張り毛脛むき出したる荒武者、三冬の嚴寒にも係らず、頭髪より湯氣を發散すると三千丈、偶々寒風の來つて、そが粗髯に戲るゝあるや、肩を聳かし竹刀を振つて悲歌一曲す、寒風恐れをなして東に逃れ去る。この荒武者の活歩するやマンテルに足らず、手袋襟卷に纏はれたる白面の遊士は面そむけて道を讓りき。

あゝ三旬の寒稽古、鎧袖を連ねて角逐せし荒武者の一群其數三十有九。これを寒稽古の皆勤者とす、

泊　武治　田島　榮吉　秋山　眞男　原　康次郎
進藤　隆一　藤田　知足　的場　鐵哉　黑岩　順三
櫻井　基　本田　秋憲　鵜飼　務　瀧澤　健男
森川　三郎　中村　泰治　板垣　邦器　瓜生　康一
寺井　嘯逸　米村　義知　寺尾　興三　野崎勝太郎
守中　憲治　吉島　重悟　山根　廣清　木澤　重親
大久保隆之介　檜田太市郎　武井　裕　宮野專太郎
尾佐竹　堅　勝田　一　白嶺　慶敏　新井　堯爾
二上　庄七　神田外茂夫　高橋　林造　長　基連
佐々木　忠　富田　武彦　元尾　大巖

寒稽古を終るや進級の沙汰あり、

渡邊八郎
右五級上へ

渡邊二郎、宇野正雄、岡田國衛、原康次郎
右五級中へ

栃木喜和次、本多政樹、進藤隆一、泊武治、横田直、
右五級下へ

富田武彦、石黑利吉、檜田太市郎、田島榮吉、宮野專太郎
右六級上へ

大久保隆之助、增井精二、赤羽初雄
右六級中へ

黑岩順三、秋山眞男、白嶺慶敏、二上庄七
瀧澤健男、中村泰治
右六級下へ

二月九日、劍道大會の記

三旬の寒稽古、練り鍛へて茲に大會の催あり、誠に其時機を得たるものと可申候、昨日より大雪霏々として至り萬象を白化致候、擊劍の試合の如く、雪と調和するもの又ある間敷と存候、時辰十点に滴るや大會の序幕は切つて落され番々の組數七十と有二、演し了れば申の刻少し下りにて候ひき、

第一回　寺井（メ、コ）健也　寺尾（メ、コ）與三
第二回　渡邊（コ、ド）滋　渡邊（コ、ド）萬介
第三回　三本（ド、メ）英　渡邊（ド、メ）泰介
第四回　結城（コ、ド）善之　宇尾（コ、ド）要次郎
第五回　中西（ド、メ）賴三　横光（コ）吉規
第六回　關屋（ド、ド）延之助　佐々木（ド、ド）忠
第七回　水上（ツ、ド）信一郎　板垣（ツ、ド）邦器
第八回　永田（コ、コ）正之　野崎（コ、コ）勝太郎
第九回　常岡（ド、ド）集雄　小林（ド、ド）退

隱れたるより顯はるゝなしとは古聖人も申され候、一回乃至九回の間は誠に現はれざる勇士の伏在してありし番組なりき

第十回　ド、コ　米村　義知　吉岡　重梧

第十一回　×　金子　秀顯　木澤　重親

第十二回　ド、ド　津山　玄道　田吹　節夫

第十三回　メ、ド　守中　憲治　コ　伊藤留三郎

第十四回　メ、メ　森尻麟之助　ド　武井　祐

第十回の米村君、寒三十日鍛ねし腕なるも吉岡君の爲めにしてやられ候は是非もなく、木澤、金子の兩君引分となりし兩雄相下らさる樣も偲ばれて喜れしく覺ね候

第十五回　コ、メ　元尾　大巖　勝田　一

第十六回　ツ、コ　稲本　安二　森川　三郎

元尾、勝田の兩君劔を行る極めて蕭々見るものをして襟を正さしめ候劔は森嚴をこそ第一要素と可致は勿論の事に候、安二稲本君は二中に修業せられし由森川君を倒せしは理の當然に候

第十七回　メ、コ　糸賀　庄造　二上　庄七

二上君、腕は糸賀君に優れりとは一班の下馬評にて候ひき

第十八回　ド、ド　中村　泰治　ド　黒岩　順三

黒岩君、は道場にて規則的の修練を積まれし由、中村君の胴を上げし時は流石々々と思はしめ申候四高の劔道部は將來大に君に囑望しつゝあれば大に自重あつて可然と存候

第十九回　メ、コ　本田　秋憲　鵜飼　務

鵜飼君の劔は稍々滋味有之候今少しく進取的とならてはと申上度候、

第二十回　メ、ツ　高橋　林造　稲本　安二

高、稲兩君共無聲堂の人氣武者と兼々承り候さりながら高橋君の押し附がましき勝負よりは小生などは稲本君の邪心なき太刀を喜び愛するものに御座候

第二十一回　コ、メ　瓜生　康一　二上　庄七

キワどき試合にては無之りしも努力的の態度は萬人の愛敬する處に候

第二十二回　メ、ド　河合勝次郎（騎務）　メ　鵜飼

と見る緋袴の裝して立ちたるは騎兵隊の河合君大に從來の平凡を壓するの傾あり如何と見る間に鵜詞君、切先鋭く胴を拂ふ、河合君轉々として汗馬より落下し夏草の繁きが下に敢なく命を終らんとせしも、痛手を負いながら忽ちにして鵜飼君の胴と面とを取りしは功六級は疑なき處に候、鵜飼若し攻擊的に出でなば不覺はとるべからざりしと我等は椽の下の力を持て見度候

○五人抜

前山隱るゝと見れば後山現はれ、大軍疾呼すると見れば既に千兵の大河を渉るあり、將軍陣頭に立てば鎧袖に掃はれて卒倒するもの一兵、二卒、三將、しかも名もなき葉武者の揚々として此勝誇る將軍を切て落すあり、意外と申すへきにや奇怪と稱す可きものにや、五人を拔くの難も此變化計り知る可からざるが故にて、又見て以て快とするも此点にあり、只白刃の下悠々として花を賞する底の心根あるもの獨り五人拔を遂行し得んか。死山血河接戰益々酣なるもマロスの神は影だに見せ給はず、程なく日は亭午となりたれば茲にて午前の試合を終り申候

村上良二千石、有田參謀長、喜多騎兵少佐早朝より來賓席を占められ、都賀田、吉見、島田の各劍客小關師範を取り廻はし武道を談ぜらる、ヂロンの城に盾守る武者の巧名嘶にも劣らず、又

傳ふる如くんば騎兵隊には聯隊旗の名譽に掛けて四高と奮戰せんと已に白馬の誓をなしさては喜多殿自ら郎黨を將て臨場せられしなれ、何はさて午後は對外試合のみなれば、心も自づと引き立ち申候。

第二十三回　（ド、ド）坂東　直二（農）　黑岩　順三

果せる哉、果せる哉、黑岩君は、續け樣に胴を占め申候

第二十四回　（ッ、メ）岩地　竹松（小中）　秋山　眞男

第二十五回　（コ）佐々木文三（二中）　高橋　林造

秋山君はテニスの傑物に御座候劍を執ても後れ給はざりしは大に慶賀に堪へず候、佐々木君高橋君難戰久しきに渡りし爲め一本勝負にて決す

第二十六回　近藤　九一（農）　增井　精三

近藤君精妙の聲ありしも增井君の溫手に刺さる柔よく剛を制すとは柔道のみに限り用ふ可きものに無御座候

第二十七回　（ッ、ド）高橋　茂（一中）　中村　泰治

高橋君酷だ敏捷にして而も着實、一矢も忽にせず、又その敵手の誰たるに論なく、大上段の敵を二つ碎きにせんとするは中村君の願ふ處と思はれ候、往々奇勝を博するあるも危險これに過ぎたるはある間敷と存候、巨艦時に水雷の襲擊に會つて不覺を見る例數多有之候

高橋君の爲めに敗れしも原因此邊にある事と存候粗密かね合せて修養あれば恐る可き劍士たること毛頭疑無之候

第二十八回　（コ、ド）穴田　留八（二中）　渡邊　一布

一見迂活の如く裝ひ敵の術策に罹ると見るや直に匕首胸を刺す如きは渡邊君の獨特ならんと思はれ候

第二十九回　（メ、メ）新村仁三郎（商）　瀧澤　健男

瀧澤君先づ左手にて敵の面を頂戴す新村君も亦面を取り双方大に疲色ありしも瀧村君遂に又面を割る、終始面をねらいし試合に候

第三十回　（ド、ド）北村清太郎（二中）　山口　健

心地宜かりし勝負とは正さに斯樣なものに候や、掛聲と共に盤根を絕つ如く切り上げしは山口君ならではと皆々申し合ひ候

第三十一回　（コ、コ）幸坂　操（無）　泊　武治

泊君の小手は奇麗なもの

第三十二回　千葉　清（小中）　田島　榮吉

田島君の早業には千葉君も施す術もなかりしにや

第三十三回　（メ、ッ）加藤作太郎（小中）　（メ）大久保隆之介

加藤君の餘裕ありしにも關らず大久保君は張り過ぎし處見え申候、物は從容迫らざるが余韻多かること丶存候

第三十四回　（メ、コ）高井　幸作（無）　田島　榮吉

淡きこと墨畫のそれに似たるは田島君の擊劍に候畫士直筆刷毛を奮へば一莖の竹雍容の妙、眞にゴテ〳〵したる洋畫の企及すべからざるもの有之候劍を行る田島君の如く手輕にして且つ田島君の如く勝を制するに妙を得たる人は吾れその此倫を見ざる次第に候

第三十五回　（ド、メ）平櫻　友作（商）　白嶺　慶敏

オ稽古の折の白嶺君は腕前中々確なるに今日の不覺は定めて殘念多かる事と奉察候

第三十六回　×(メ)(ド)金野佐太郎(商)　進藤隆一

平生は力量ある人も一旦勝負の場合となれば存外に堅くなり疎くなる人往々有之候、取る可き筈に非らざる引分を爲したるは進藤君の爲めに惜まざるを得ず候

第三十七回　(ド)伊藤參次郎(騎)　(ド、ド)石黒利吉

寒稽古の間は石黒君病篤かりしに今日しも壯快なる足下の試合を見る喜悦何物かこれに加かんや

第三十八回　×(メ)(コ)青垣喜作(騎)　泊武治

似たり寄つたりの試合に候我塵を蹴つて無聲堂を荒れ廻はりしも、雌雄決するなく長揖して西と東に馬首を回らし候

第三十九回　(メ)中本茂長(騎)　(ド、コ)渡邊八郎

玄人にはなるまじとは賢しき人の誡めなり、玄人となれば附上りノボセルもの屬々なれば也、して八郎君は劍の妙奥に達したる玄人に御座候、然りながら八郎君は玄人にして玄人の醜を脱したる人格ある人に御座候、

此一戰に騎兵隊は塵も止めず逃げ失せ申候

第四十回　(コ、ド)齋田富田武彦(專)

一進一退、富田君立派に胴を切り上げ間もなく小手を墜す、

第四十一回　×(コ)(メ)敷田外記(專)　檜田太市郎

若し夫れ獰猛なる擊劍ありとすれば、又壯快なる擊劍ありとすれば檜田君の如き蓋し其最ならんと存候彼の劍を行る血を見ざれば止まざる征夫に候、然しながら檜田君は八郎君と併稱せらるゝ無聲堂の人格に候、彼の太刀を打ち下ろす時猛虎の嘯き荒るゝ如し、焉んぞ知らん彼は獰猛に太刀振る間も常に微笑を湛ふる人なるを、檜田君を見るもの其劍を見ずして、其人を見る可し、

第四十二回　(メ)(コ)成瀨與三郎(二中)　瓜生康一

第四十三回　(ド、メ)杉本一見(小中)　(コ)増井精三

蘆城中學撰手は惣じて見榮あるやに思はれ候そが中にも杉本君の如きは其態度大に推賞に値申候増井君の敗れし必らずしも増井君の弱かりし故のみにては無之候

第四十四回　×(メ)(コ)柳本田忠雄(二中)　秋憲

第四十五回　(ツ)茨原(コ、メ)石黒利吉(專)

第四十六回　(ド、コ)宮崎山口直正(小中)　健

一は益々石黒君をして名を爲さしめ、次は又も山口君の胴は妙に入れりと賞する材料となりし耳

第四十七回　(メ、メ)中村秀二郎(一中)　大久保隆之介

大久保君の面は確に中村君の腦天を粉齏致候

第四十八回　(メ、ド)安田金三郎(無)　(コ)岡田國衛

双方共黒胴の着付にて体の太りたる樣も相似たり、好箇の組合と可申候安田君遂に岡田君の面を打つや事決す、

○無刀流之形　(メ)本校師範小關敎正　師範代理岩越正

無刀流五点之形、評言を挾む余地無之候

第四十九回　(メ、メ)中本茂長(騎)　安田金三郎(無)

騎兵隊の中本君再び戰を安田君に挑み渡邊君にやり込められし宿怨を漸く安田君に於て晴らし申候

第五十回　(メ)楠正路(一中)　(メ、メ)田島榮吉

一中の鏘々たる豪傑も田島君の面には一たまりもなく敗北致し、田島の面なる哉と坐人をして感嘆せしめ申候

第五十一回　コ、ド・才記　省三（農）　・富田　武彦

才記兄弟携提して毎年吾劔道部に來襲するは一寸偉觀に候不幸慶三君、當日に限り見るを得ずされど省三君の功名嘶は兄弟の間の好笑の資たるに相違無之候

第五十二回　コ、コ・幸坂　操（無）　・本多　政樹

脆くも兩の小手とも落ちしは遺憾千萬に候いき、

第五十三回　ド・高澤　冠一（專）　メ、コ・原　康次郎

原君場に立つや磐石の如く強し、偶々脇腹を負傷することあれど、其面と小手との精確なるは匹儔を見ず、蓋し手強き若武者に御座候

第五十四回　・三好　直久（一中）　メ、ド・進藤　隆一

思はず商業の金野君に敗れし進藤君は非難なく三好君の胴と面とを取り申候進藤君として此位は尋常の事なる可くと存候

第五十五回　メ・鳥居兵四郎（一中）　ド、コ・宇野　正雄

番數の進むにつれ興趣も著しく各人の頭腦を支配し始め候、面ッと審判の聲あるやハッと觀衆は思はず之に和し胴とあればドッと響動く、鳥居君先づ面を畧し息つぐ間もあらせず宇野君小手と胴とを占め一舉して勝負を制す、勝負はすべてかくあり度きものに候

第五十六回　・三好　外吉（監）　ド、コ・渡邊　二郎

黑胴に北辰章を浮べ、美髯を貯へ華美、神速を以て際立ち見ゆるは四高の兩渡邊の一人として去二年間盛名を擅にせし二郎君に候、無聲堂裡の眞摯を代表するはかの八郎君にして始めて之を善くす可く、男兒天然の快活なる意氣の權化とも見る可きは二郎君を措いて他に無之候、

見る間に三好君は小手を失ふ、やかて二郎君の太刀を廻はす漸く急と相成候、嘗て野球界の麒麟兒栗田のプレートに立つや彌次馬一齊に「栗田ッマワセ々々」と叫ぶや栗田腕を前后に廻はすこと三五回やがて猛烈なるカアーブを連發す、栗田腕を廻はすやバッタアー既に三度振と定ること野球界の憲法の如し、今や二郎君連りに竹刀の突先を旋轉せしむ此旋轉の止むや敵は胴を割らるゝか、喉に風穴を明けらるゝ宣告を頂くこと疑なし――――三好君果然胴を切らる――――

第五十七回　・德田　毗雄（警）　コ、メ・本多　政樹

"本多君の面は南下軍以來定評のある處に候、德田君先づ此著明なる面を味ふや本多君すかさず、外側よりボーンと小手を落し申候

第五十八回　メ・池上　コ、コ・泊　武治

泊君小手ッと叫ふや感應的に池上君參いたッと云ふ小關師範苦笑して泊君の小手を是認す、眞正面なる滑稽とは之に候

第五十九回　・島田　彌一（警）　メ、コ・原　康次郎

島田君は老練組と存候一方はと見れば青年の元氣を一身に集めたりとも言ふ可き原君に候稽古に於て原君などは幾十人相手にし候とて平氣なる元氣組に候、老練と元氣との太刀の合するや元氣は先づ老練の小手を落とし返す刀に面を取り申候・

第六十回　メ、メ・田中　（專）　・岡田　國衛

專軍の振はざる今日の如く甚しきは無かる可くと存候、幸にも田中君殿將を承り高く岡田君

の面を擧げ辛ふじてスコングの屈辱を逃れ申候

第六十一回　●高村　金春（監）　コ、ド●宇野　正雄

宇野君直に高村君の胴を深く切り、次で竹刀ぐるみに小手を落す

第六十二回　メ●木村定次郎（外來）　ド、ド●渡邊　八郎

言ふ迄もなく六十二回は最も注目す可き勝負に御座候、木村君至る所連戰連勝人なき曠野を行くが如くにし今ぞ四高の牙營に肉薄したるにて候

八郎君先づ木村君の胴を取る、岩越師範代曰く

「胴の入れ方は危機一髪と云ふ可く僕輩かの呼吸を解する能はず」と

木村君八郎君の面を取る、僕等思へらく

「八郎君必らず勝つ可し」と

木村君亂暴と見ゆる迄に八郎君に肉薄す、八郎君の眼光一尖するや木村君八郎君より横面を頂くこと三ッ四ッ

八郎君、電光石火、木村君の胴を眞二ッにす

○番外五人拔

一中の烏居兵四郎君、本校の二郎渡邊君五人拔きの名譽を得、これを以て大會の終を結び原委員なぞは拍手して本日の大會の好結果を悅び居られ候。（岡目かたし）

演說部報

○二月四日

至誠堂に於て午後二時より開會す、出演者三十有余名、本校あつて以來嘗て見ざる多數なり、始め抽籤に依らんとしたるも行ける處迄行くに如かずとし順を逐うて進みしに果たして未だ其半數にすら至らずして止みぬ、聽衆殆んど四百以上、

天下併呑論　英二　常岡　隼雄
嘆息病　英二　堀田　時次郎
感情家と熱烈家　英二　西山　篤郎
痛快なる人　英一　高野　松次郎
落第の人か及第の人か　英二　京極　逸藏
我校風と某新聞　獨一　渡邊　達也
南下軍　獨一　成川　武男
智と信　英一　中村　泰治
○二十世紀に於ける一大勢力を論ず　獨二　佐藤　正俊
天才とは何んぞや　英一　宇野　耕純
學者論　獨一　熊谷　誠
愛國心　英一　坂井　末吉
カーライルの英雄崇拜論を讀む　獨二　伊藤　運隆
現實に注目せよ　英二　山下　榮次郎
東北の現今　獨一　守中　憲治
秀吉と家康　獨二　小林　退
學生とステッキ　英一　大森　深
島國的根性を廢せよ　英二　野田　小三次
國際上の新觀念を要求す　英一　福田　太一
時勢論　文一　山田　敏一
正を踏んで恐るゝ勿れ　英二　植村　義重
韓國雜感　文一　津山　玄道
反抗的精神論　獨一　西村　邦雄
友情　獨一　日戸　英雄
自信力あるものは偉大なり　獨一　佐々木吉太郎
青年とモンロー主義　獨一　山口　作之助
木下尙江の小說を論しギョーテのファウストを想ふ　獨三　尾佐竹　堅

○三月六日、午後二時より至誠堂に開會

殆んど一ヶ月の後、前回に漏れし諸君の爲めに演說會を開く只其期間の余りに久しかりし爲め講演を斷念中止せられし諸君のありしは全く委員の怠慢茲に至りしものにして深く謝する所なり、氣合拔けした爲めと時間の配當其よろしきを得ざりし等の原因よりして聽衆も前回に比し甚だ懸隔ありしも尙七十有余名を集め得たるは慶賀に堪へざる處也、

正を踏んで恐るゝ勿れ　英二　植村義重
國家主義　英二　山下榮次郎
僕の一家　獨二　小林退
四高ニズムの自覺　英三　北澤哲
陽春四月洛陽の野球戰　獨三　尾佐竹堅
青年とモンロー主義　獨一　山口作之助
自信力あるものは偉大なり　獨一　佐々木吉太郎
智と信　英一　中村泰治

短評、植村君、壇に登りし時聽衆稀少、然も臆するなく約四十分間倫理の學說より　良心の命ずる處に從つて正を踏めと結ばれしは大に敬服せざるを得ず、——山下君、四高雄辯家を見ざる久し、只山下君あり萬丈の氣焰を吐くに足る、國家主義の太刀を振つて縱橫に切り廻はりしは近來の大演說なり、——小林君、君の壇にあるや場內常に笑聲起る輕快の辯は君の特長か——北澤君、英風颯々たる君の辯を久しぶりにて聽くを得たるを欣ぶ——山口君、引證多き堂々たる大議論願くば自重せられよ——佐々木君、聽衆多かりなば、君は大に論議せられしならんに、や、手加減せられしを憾む、——中村君、君の雄辯奇才已に定評あり、今日は事故ありて中止せらるゝ、而も四高の演壇君に期待する所深し、幸に自愛自重せられよ。（かたし）

時習寮大茶話會を觀る

寮生と通學生と唯一連絡機關たる大茶話會の開催さられざること、茲に足掛け三年にもなるので、今度あらたに擧行せられるといふのを耳にした時には、非常に嬉しく感じた。學校のストープの廻りで、まだやりもせぬ先きから、色色と月旦や臆測を逞うしたる友の御說の出たのは一週間にもなる。何は兎もあれこの大茶話會出席せずして措くべきかはと、招待券を懷にして宿を飛びだしたのは午後の四時過ぎ、日は一月の二十五日のことだ。遠くもない道程だが例の霰めが斜めに頰にうちつけるのを、忍んでゆきついた寮の入口には、十數の接待掛の諸君が居られて、さあ何卒こちらへと御叮嚀なる挨拶がある。有り難うと會釋して內に入れば、通學生の爲めにとて特に設けられたる扣室があつて、暖かにストープも燃ゑて居るし新聞雜誌などを載せた机も正しく置かれてある。客を待つに鄭重なりの評は確かに動かすべからざる者で、余はこゝに御禮を述べると共に、尙この美風の今後に於ても失はれざらんことを切望する。かれこれして居ると電燈が點く。配膳も整つたと見ゑて號鐘が鳴る。長い廊下を二廻り三廻りしてぞろ〳〵と食堂へ詰めかける人々は絕ゑもされず、あの廣い室も瞬く間に人でうづめられて仕舞つた。それもその筈、主客合せて二百五十名にも及んだのであるもの。蓋しこの食堂建設せられし以來の多人數の會食である。皆各自の椅子につくや食事委員の小畑君は立つて、長いそして熱誠なる演說をされた。御馳走を眼の前に扣へて聊か苦しく感じたは喰ひしん棒のせいかしら。さて御ゆるりとお上り下さいといふので、箸をとつて山海の珍味を頂戴する。惜しいことには吸物も何も醒めはて〻仕舞つて齒がしみる。御飯はまた滅法に强い。話し話し三椀を傾けて席を立つとそれでも一番早かつたには恐れ入つた。又廊下をめぐつて今夜の會場無聲堂へと行く。見れば花瓶には生花もあるし、場の周囲は幔幕でとりまかれ、萬國旗は天井を縱橫に交叉して居つて尠からず氣持が宜い。和氣はおのづ

から靉々として堂内にこもるのを覺えた。ボツ〳〵やつて來る通學生と食堂から出て來る人々とはさまで廣からぬ會場を立錐の余地なきまでに滿たして、人香の四囲に磅礴たるの觀があつた。

六時に近き頃寮生委員吉田君は登壇せられる。明晰なる音調を以て寮の大茶話會を開催するに至りし所以を述べられた。其の一に吾々はこれを以て樂しき追懷の實現をなすもの也、といはれたのは特に自分の胸に響いた。忘れもされない、自分が故郷をはる〴〵金澤下りとやつて來て、はじめて入れられたは此の時習寮、お互に隨分駄々を捏ねて惡戯もしたもんだ。ことに其の當時只一度大茶話會が催された際、自分などもアクタアの一人となつてこの檜舞臺に冷汗を流したことなどさへ胸に浮かんで、寮生活をそぞろと追懷せられずには居られなかつた。次いで登壇せられたのは吉村校長閣下、例の嚙んでふくめる樣な御話し振り、重に益軒先生の御紹介をせられた。中々ながいから只大休をかたるのみだと仰せられたが、扨て四十分五十分となるが御しまひになる樣子もない、失禮ながら欠伸もでる。漸う終つたと見ると今度は中野生徒監が登壇、御話しは何かと聞けば鐵の講義、聊か塲が動搖してきてあちこちで話聲が出る。この次を引き受けて登壇せられたは三竹生徒監、さすがは馴れたものいひ振り、抑揚もあり、頓智もあり、しまつても居る。一寸その口吻を寫せばこんな調子だ「こゝに十七八の娘が居るとする。(この時どつと皆が笑ふ、すかさずに)いや笑談ぢゃ無いぞ、そんなことで笑ふやうな奴は駄目だ」といつたやうな塩梅。次には寮生側より矢島、富田松、渡邊得の三君通學生側より堀田、小林鐵、中村泰、京極、宇野耕の五君が相次いで登壇せられた。最も塲所に應じて成功したのは中村君かも知れぬ。されど他の人々も皆辯を以て其の名を轟かすもの丈に一つも聞き飽きがしなかつた。その中でも矢島君の熱烈、堀田君の巧妙、京極君の皮肉、宇野君の物騷は、確かに各人が認めたことであらうと信ずる。

これより愈余興にうつるのだ。演說があまり時間をとつて仕舞つたので、取りかゝるとすぐ九時になつた。われ人の待ち設けたる余興が始まるといふので、喝采は暫しの間鳴りも止まず、眞似面にかまへて居た人々さへ嬉々として笑聲をもらして、いひ知れぬ和樂が人から人の胸へと流れてゆく。

誰かが「茶話會とは余興するを以て主とする者に非ず、といはれたがこんな事はいはずとも極つて居る。さりながら茶話會に余興あるを以て咎めたなら、そは大なる心得違ひであらねばならぬ。主とする者に非ずとするも尙最も必要なる者とするに於ては、異議をいふべきで無い、試みに茶話會をして單に演說會か討論會かの如きものに終らせたとしたなら、果して何處に吾人は和氣を求め團欒を得られやう。主客共に笑ひくづれるやうな滑稽的な無邪氣な天眞爛熳なる余興のあるありて、この間に隔障なき意思を交換し能ふのであるのでは無いか。余はこの主意のもとに大に余興の必要を思ふのである。

先づ第一に中の四、五の樂隊吹奏がある。お宮で用ゐる太鼓がドン〳〵なり出したには聊か珍と感じた。惜しむらくは法螺がない。幕の切れ目切れ目には蓄音器があつた。聲は感心しない。次ぎなるは中の三、四の「神之聲」である。出來榮は先づ中の上であらう。三幕あつたがあまり連絡がとれて居らん。敢て通がるにはあらねど、素人のやつて成功するのは一幕物に限る

長いものをやつて漸次感興を割かすより、かへつて短く引き縮つたものをやつて、それ丈を觀者の眼に映せしめれば足りる。こは一方に於て時間の經濟ともなる。この点で成功したのは當夜の「陸奥之花」だ。この「神之聲」中振つてゐたのは終りに出た巡査で、何分いふべき難もない。次ぎに中の九、十の「號外」がある落しが全然失敗した爲め、全体からいへば價値がないことになるが、車屋の女房などはよく出來た。僕の注文をいへば、いくら余興でも選擇に意を注いで貰ひたいことである。あんまり學生に緣ぞほい突飛なことをしたり、惡感を催させがちなるは、避くるに若かずである。次に北の十一、十二の「寮生百行事」がある。あまり成功しなかつたらしい。次に北の九、十の「印度人」がある。手品だ。同室の「ダイアローグ」があつたが、苦心の割合に人の感興を起さしめなかつた。蓋し茶話會に適せるものに非ざることを證したものだ。次に北の七、八の「日本意地の輝美談合」がある。爺さんは飾りもので婆さんが獨りでやり了せたのは感心、鬼か島へ愈征伐に向ふといふ段になつて、肝心の桃太郎が意氣銷沈してゐたのは頗る見ゐ劣りした。鬼と奮戰中、黑鬼かが振り舞はした鐵棒に天井に懸かゝつて居た電燈の笠を割つたのには苦笑千萬。次に出たのが中の十一、十二、十三の「陸奥之花」である。寮に其人ありと知られたる大頭君が仰山な筋書說明も、實際に演ぜられたる所を見るとさうは咎められぬ。選擇に於てもすぐれて居る。季節も一致して居たものだから想像を起しやすい。殊によかつたのは總てアクタアが無言で、單に悲壯な調のオルガンと、よく畫かれた背景と、舞臺面の配置とで其の實況を思はしめたことである。兎も角難のない出來榮えたるのみならず、當夜に於る余興中稱するに足る者の一なりしことは觀者一般の說らしい。次いで北の十五、十六、北の五、六、北の一、二などの余興があるべき筈だつたが、時間がたそくなるといふので中止することにしたさうである。北の三、四の「夢之蝶」丈は、是非やらせて呉れといふのでやつたのださうだ。成程觀るとそれ丈の價値は充分ある。幽玄なる琴のしらべにつれて、胡蝶のひらりひらりと舞ふのは美しかつた。傍の方で幻燈のレンズをかへると、蝶の翅は赤から黃、黃から紫といふ風にかはつてゆくので、これが凡そ十數回、うまく面色の配合の順序が出來てた時は、誰れしも思はず歎賞の聲を漏らした。しかし難をいへば、蝶の舞ひ方があまりに單調だつたことである。余は「陸奥之花」を、その選擇の点に於て勝つたるものとすれば、この「夢之蝶」は、想の奇拔な点で採らうと思ふ。當夜觀客の眼を喜ばしたものはこの二つであらう。これが濟んで今度は「鴻門之會」となる。これは寮の各室を通じてチャムピオンを出してやつたものださうである。余らがまだ入學せぬ先きに、一度やつたことのあるものだといふ。見ぬことだから比較は出來ないが、どうもあまり感心はされない樣な氣がする。しかし鎧など幾領も整へて、裝束丈は堂々たるものだつた。練習も余程せられたのだと聞いたが、隨分まの拔けた失笑を禁せしめざる科白があつたのには聞苦しかつた。滑稽物で無い限りは矢張り引きしまつた所があつてほしい。通じてよく出來たのは項羽であらう。ことにその割腹の際など、舞臺をひとりであづかつて充分に活動した手腕は偉いものだ。それと樊噲の劍舞もよく出來た。

以上で余興は終りを告げ、こゝに校歌寮歌を聲高くに合唱し閉會することになつた。時に午

前の一時半もすぎて二時に近き頃、實に近來稀に見る盛會であつたと共に、寮は確かにその目的とせるところの者を獲得したと信ずるのである。この点に於て余は時習寮大茶話會萬歳を大唱せざるを得ない。

ある友が、先生を觀察するのも余興位の趣味がある、といつて當夜の評をなした言に曰く、よく笑ふ人は小田切先生なり。「鴻門之會」に乘り出して見物したのは赤井先生なり。一邊も笑つたことなきは校長先生也。但し桃太郎が、大きな桃の中からオギャと泣いて飛び出した時には大笑せられたり云々。

大茶話會の狀況は大体上に述べたやうなものだが、序をもつて少しく時習寮觀をやつて見やうと思ふ。或は皮想の觀に陷り、或は謗ゆるやうな点があるかも知れねど、兎に角余は余の見解の下に時習寮觀をやるのだから、不服な人は大に辯護し、或は大に非難して呉れたまへ。

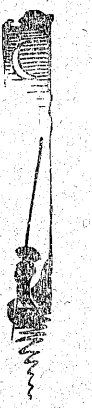
矢張り歴史を繰り返す必要がある。かぞふれば已に三年の先きのこと、二學期の試驗を前にひかへた三月廿日の夜、賄所から火を失して堂々たる南寮をはじめ中北の二寮を殘して、他は全く一朝の灰と化せしめたる凶事は、わが時習寮にとつては實に容易ならぬ出來ごとであつたのだ。われ人の忘れんとして忘るべからざる日附を作つた。當時南中北の三寮に立て籠つて居つたる寮生百五十は、生徒監が熱心なる斡旋も注意もよそにして、恰かも蜘蛛の子を散らすが如くに三々伍々退寮し、四月のはじめ迄に留寮したるは、僅かに三十八名といふ情無きことにたち到つた。しかし幸か不幸かこの厄災の後を踏み留つたる三十有八名の寮生は、眞に寮を思ふの志士であつたので、こゝに隨分亂暴極つたる寮風を根本から刷新するの期を得せしめた。

即ち火災がレボリュウションとなつて志ある者に自覺を與へたのであつた。この自覺の先導者が取りも直さず三十八名の留寮生で、彼等は相盟して「吾人は時代に超越したる寮風を作らざるべからず」となした。吾が時習寮の所謂超然主義なるものゝ起原は實にこゝに在るのである。

當時彼等の狀態は如何といふに、それはまた實に悲慘なものであつた。赤穗の義士は四十九人あつたといふが、彼等は數に於てなほ劣つてをつた。これに加ふるに内外の敵は、かれらの孤城を四面八方から攻擊して楚歌の聲どころではなかつた。火災後の不完備は顏洗ふ水にさへ窮したことが度々あつた。誤れる通學生間には當時の寮を評して、曰く沈滯なり、曰く平和に戀々たるもの也、曰く事なかれ主義なり、曰く惰眠を貪るものなりなどゝ惡口雜言を幷べ立てた。而かもこの忍ぶべからざる内外の敵に忍んで、努力勉勵愈基礎を堅固にしたのは超然主義その者であつた。嗚呼超然なるかな超然なるかな、爾來今日に到る二星霜、彼等はこの主義を標榜して、一糸亂れず歩武堂々と向上した。其の態度たる實に雄々しくも勇ましきものであつたので、口さがなき通學生の一部分の人も遂に緘默するの止むなきに至つた。かくの如くにして外敵に勝ちわたる寮生諸君は今や新築の食堂あり浴室ありて内には何の不足なること無く、和樂の氣二寮に滿ち滿ち恰かも春風の駘蕩としてわたるが如く吾人をして欣羨措く能はざらしむるのである。吾人は今日の時習寮を呼んで和樂園といふに何等異存は無い。嘗て某新聞紙に寄宿舍生活の記事があらはれて、一高も亦これに掲載せられた。讀んで余は驚かざるを得なかつた。われが一高の精神であり主義であるといふ人あらばいはしめよ、余は敢て云爲せんと欲

するものでは無い。只飜つて我が校時習寮に對して、恐らく多く比を見ざる立派なる寄宿舍なるべしとの念を愈たしかにしたのである。

謳歌すべきわが時習寮、欣慕に堪へざるわが寮生諸君よ、余は今日の諸君に對して讃詞を述ぶるに吝かなるものでは無い。今日あるを致したのも必竟諸君が自ら培ひ自ら耕して、以て收め得たる美しき花でもあり見事な果實でもあるのだ。只この花が空しく散り、この果實が徒らに腐ることの夢にもあらしめざるやうにと切望に堪へない次第である。近くその工を終らんとして居る新寮もある。この九月は寮にとつては一大發展期なると共に、また一方には頗る重大なる時である。尤も愼重な態度と尤も不拔な覺悟とを要する。萬一人員の殖えたなどいふ些少の源因からだらしなくなつたりなどすると容易ならぬことである。切角基礎の定つた主義も瓦解せずには居られまい。かう成つた日には騷いでもわせつても舊狀にかへすは、一通りや二通りの骨折仕事では無い。どうしても一大革命の必要が生ずる。しかし革命の情を思はゞ吾人は寮生諸君に向つて、今日の稱する値はありとも難なき所謂超然主義を墨守して、益向上發展あらんことを祈るものである。敢て寮生諸君に呈せんとする余が希望はこれに外ならぬ、妄言は幾重にも深謝する。（寮を愛する通學生の一人）



投書心得

一投書は本會原稿用紙に限る
一長文と雖も全文を寄贈せざれは掲載せず
一雜誌上には雅號のみを記載することを許せども姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし
一如何なる種類の投稿にても宜しされど或は政治を論し或は德義に背くものは一切掲載せず

明治四十一年三月二十九日印刷
明治四十一年三月三十一日發行

編輯兼發行者　吉村政行　石川縣金澤市早道町五十六番地
印刷者　生沼倍男　同縣同市穴水町二番丁廿九番地
印刷所　明治印刷株式會社　同縣同市高岡町九十番地
發行所　第四高等學校北辰會